東洋美術大観 十四

東洋美術大觀 十四

750
T12

東洋美術大觀第十四册 支那彫刻之部 承前

目次

齊周兩代の彫塑……十三
隋代の彫塑……十四
唐代の佛像……十六
唐代の道像……廿一
陵墓の儀飾及碑碣……廿二
唐俑……廿三
唐鏡……廿五

第百　圖　河清元年造坐佛三尊石像
第百一圖　建德元年造坐佛三尊玉石像
第百二圖　坐佛石像
第百三圖　武平三年造立佛三尊銅像
第百四圖　武平十年造坐佛三尊銅像
第百五圖　十一面觀音甎像
第百六圖　文殊甎像
第百七圖　普賢甎像
第百八圖　天和三年造老君石像
第百九圖　開皇三年造觀音石像
第百十圖　觀音石像
第百十一圖　觀音石像
第百十二圖　觀音玉石像
第百十三圖　觀音倚像
第百十四圖　四神十二辰鏡
第百十五圖　四獸鏡
第百十六圖　鳥獸花文鏡
第百十七圖　龍門鑼鼓洞本尊左挾侍菩薩像
第百十八圖　龍門鑼鼓洞本尊右挾侍菩薩像
第百十九圖　龍門奉先寺盧舍那佛左方挾侍菩薩像
第百廿圖　龍門奉先寺左方天王像
第百廿一圖　龍門奉先寺左方金剛像
第百廿二圖　龍門智運洞諸像
第百廿三圖　龍門智運洞口獅子
第百廿四圖　伊闕香山寺第一洞佛像
第百廿五圖　伊闕香山寺第二洞佛像
第百廿六圖　伊闕香山寺第二洞挾侍菩薩像

第百廿七圖　燉煌千佛巖菩薩塑像
第百廿八圖　燉煌千佛巖聲聞塑像
第百廿九圖　貞觀十三年中書舍人馬周造佛靑石像
第百卅圖　總章元年造彌陀碑像
第百卅一圖　咸亨三年造彌陀石像
第百卅二圖　咸亨四年造二級石龕像
第百卅三圖　儀鳳三年造彌陀五尊石像
第百卅四圖　雍州同官縣武定村碑像
第百卅五圖　神龍元年造彌陀石像
第百卅六圖　景龍二年造彌勒三尊白玉石像
第百卅七圖　長安三年高延貴造彌陀三尊石像
第百卅八圖　長安三年韋均造坐佛三尊石像
第百卅九圖　長安三年蕭元眘造彌勒三尊石像
第百四十圖　長安三年李承嗣造彌陀三尊石像
第百四十一圖　長安三年德感造十一面觀音石像
第百四十二圖　長安四年姚元景造彌勒三尊石像
第百四十三圖　十一面觀音石像
第百四十四圖　十一面觀音石像
第百四十五圖　十一面觀音石像
第百四十六圖　開元十二年揚思勗造坐佛三尊石像

第百四十七圖　馮鳳翼等造坐佛三尊石像
第百四十八圖　坐佛三尊石像
第百四十九圖　倚佛三尊石像
第百五十圖　寶冠彌陀三尊石像
第百五十一圖　坐佛石像
第百五十二圖　坐佛白玉石像
第百五十三圖　地藏白玉石像
第百五十四圖　坐佛白玉石像
第百五十五圖　釋迦白玉石像
第百五十六圖　釋迦石像
第百五十七圖　菩薩白玉石像
第百五十八圖　彌陀刹土檀龕
第百五十九圖　業用虛空藏菩薩木像
第百六十圖　金剛虛空藏菩薩木像
第百六十一圖　千佛寺千佛甎像
第百六十二圖　印度佛甎像
第百六十三圖　坐佛雙塔甎像
第百六十四圖　羅漢甎像
第百六十五圖　地藏甎像
第百六十六圖　觀音甎像

第百六十七圖　坐佛甎像
第百六十八圖　立佛及化佛甎像
第百六十九圖　倚佛三尊甎像
第百七十圖　乾封三年造天尊石像
第百七十一圖　弘道二年造天尊碑像
第百七十二圖　開元十三年造天尊石像
第百七十三圖　天寶九載造天尊石像
第百七十四圖　武氏順陵石獅子
第百七十五圖　武氏順陵石獅子
第百七十六圖　美人彈阮咸白玉石像
第百七十七圖　左監門大將軍樊興碑
第百七十八圖　大唐三藏聖教序碑頭
第百七十九圖　大秦景教流行中國碑
第百八十圖　立人俑
第百八十一圖　文官俑
第百八十二圖　武人俑
第百八十三圖　立人俑
第百八十四圖　立人俑
第百八十五圖　立女俑
第百八十六圖　立女俑
第百八十七圖　立女俑
第百八十八圖　立女俑
第百八十九圖　立女俑
第百九十圖　立女俑
第百九十一圖　立女俑
第百九十二圖　辟邪俑
第百九十三圖　駝俑
第百九十四圖　胡人俑
第百九十五圖　馬俑
第百九十六圖　胡人俑
第百九十七圖　騎馬人物俑
第百九十八圖　馬俑
第百九十九圖　鞍馬俑
第二百圖　明器駕牛
第二百一圖　十二辰午俑
第二百二圖　犬俑
第二百三圖　豕俑
第二百四圖　羊俑
第二百五圖　鳧俑
第二百六圖　鳥獸蒲萄背圓鏡

第二百七圖　鳥獸蒲萄背圓鏡
第二百八圖　十二辰背圓鏡
第二百九圖　鳥花背圓鏡
第二百十圖　鳥獸花背八角鏡
第二百十一圖　鳥獸背圓鏡
第二百十二圖　月桂背八角鏡

支那彫刻之部 承前

齊周兩代の彫塑

高齊は東魏の後を承けて亦鄴に都し、文宣帝大いに佛寺を起し、僧尼諸州に滿ち、供養行道相續いで絶えず。佛像造立の盛なること寧ろ東魏に過ぐるものあり。龕窟摩崖の造像所々に鑿造せられき。その最も著れたるを龍門の藥方洞とす。藥方洞は古陽洞の北に在り。五尊一具の本尊の外、龕像壁上に滿てり。武平六年都邑師道興の造像記に依りて、鑿造の年代を考ふることを得。鞏縣の石窟、太原諸寺の石室亦皆造像あり。慈州の石窟寺は文宣帝の造る所、晉陽西山の摩崖大像は後主の造る所たり。甄官署別に石窟丞を領したるは、前後たゞ高齊の世あるのみ。惟ふにこれ等の諸窟龕像は、即ち石窟丞の營管する所なりしならむ。崖窟以外の石像も今に存するもの極めて多く、その銘刻皆以て徵すべし。造像の尊種は元魏の世彌勒最も多かりしが、高齊に至りては盧舍那佛の造立最も多く、觀音、彌勒、釋迦これに次ぐ。信仰の變遷亦以て考ふるに足れり。彌陀挾侍の菩薩名を觀音、勢至とし、釋迦の挾侍を藥王、藥上の二菩薩と爲せる明徵も、齊代に至りて始めてこれを見る。雙觀音又は雙彌勒とて、一座の上に一光又は雙光の兩尊を造ることも、亦特に高齊に行はれたる像式なり。石像の材に競ひて美石を用ゐ、殊に玉石を賞用せしことも齊世を以て最と爲す。碑像の最盛も亦齊代に在り。天保八年の劉碑造像碑、(河南登封に在り。)河清三年の在孫寺(登封縣東蔣莊に在り。)及永寧寺造像碑、(陶齋藏石。)天統三年韓永義等、(河南偃師に在り。)同五年陑赤齊、(沂州府學宮に在り。)武平元年馮暉賓の造像碑、(登封少林寺に在り。)同三年の興聖寺四面像碑、(山東費縣に在り。)等當時の遺品今に少からず。武平四年臨淮王の碑像(山東青州府城龍興寺に在り。)に至りては、殆ど碑像巨壯の極と謂ふべし。兩面像、四面像も亦益々盛に行はれ、更に六面、八面の石柱像あり。各面層々に龕を設けて佛像を彫出せり。技術の樣式は概して東魏の餘波に屬す。今高齊石佛像の一例として、河清元年七月廿三日陳海榮所造の一軀(第百圖。)を掲ぐ。前出龍門蓮花洞南壁にも天保八年所造の釋迦像(第七十一圖。)あり、參看すべし。

高齊と同時に宇文周あり。西魏の後を承けて長安に都す。西魏由來造像の盛ならざりしことゝて、宇文周の佛教像設從ひて高齊に及ばず。加ふるに建德の滅法ありて、前代の佛像毀拆せられしものその數を知らざりしかば、遺品亦多からず。摩崖像には僅に四川簡州の大佛崖、秦州の麥積崖あるのみ。然れども碑像等の流行及像式は略高齊に同じ。今周代石佛像の一例として、建德元年八月卅日比丘惠璨等所造の玉石像(第百一圖。)を掲ぐ。これと樣式を同うせる無銘の石佛坐像(第百二圖。)も周代遺品の一なるべし。

金銅像も亦齊に盛にして周に微なり。小像の高齊の年號あるもの少からず。就中觀音像最も多し。面貌衣褶の樣式は石像に同じく、光背の

蓮瓣形一種の特徴あり。こゝに武平三年比丘惠榮所造の立佛三尊像第百三圖。及武平十年所造の坐佛三尊像第百四圖。を掲げて、齊代金像作風の鑒賞に資す。

瓦甎の佛像は、周に至りて甎塔の史徴あるに考へ、その製作の始めて起りしことを知るべし。近年長安出土の甎像中、往々周代の物と思はるゝものあり。本書收むる所の十一面觀音及文殊普賢の三軀第百五乃至第百七圖。の如きは即ちこれなり。共にその天蓋の形式の元魏の遺風に屬することは、古陽洞等魏世の諸像に依りてこれを考ふることを得べく、隋唐に見ざる所のものたり。而して十一面觀音法は宇文周の耶舍崛多が譯したる神咒經を以て初出とす。以てこの像の周代の遺品なること殆ど疑なきを知るべし。

道教の像設は齊周共に頗る行はれたり。齊に在りては姜纂、孟阿妃、馬天祥等の造像銘夙に金石の書に著れ、周は皇帝受籙の事元魏太武の舊に依りし程なれば、道像は却りて齊より盛なりしものゝ如し。本書載する所の老君像第百八圖。は周天和三年の所造に係り、前に三脚の挾軾を置き、左手をこれに凭せ、右手に符を執りて坐し、左右の二眞人笏を持ちて立ち、趺石に香爐及道民供養の像を刻せり。惟ふにこの像式は齊周の世に至りて始めてその典型の成立せしものなるべく、隋唐の諸像多くは皆これに倣へり。甄鸞の笑道論の如きは、偶、周世道教の盛を反徴するに足る。これに依るに當時道像の挾侍一を金剛藏、一を觀音と曰ひきと見ゆ。由來佛像の摸擬に出でし事とて、復怪むを須ゐざるなり。

齊周兩代に於ける佛道以外の彫刻には、周に西域諸國の樂舞を傳へて、その龜茲樂に獅子あり、武帝齊を平げ、城舞を作りて皆木面を用ゐ、齊に蘭陵王入陣曲起りて亦代面を用ゐしこと等の徴すべきあるに過ぎず。獅子の木頭及陵王面は、我が國の傳ふる所に依りて、その舊態を想像するに難からざるなり。

隋代の彫塑

隋の文帝深く佛教を信じ、周武滅法の慘迹を慨し、詔して形像を尊敬せしめ、碎身遺影皆有司に命じて莊嚴せしむ。故像を修治すること百五十萬八千九百四十餘軀、新に金銀、檀香、夾紵、牙石の像を造ること大小十萬六千五百八十軀。加ふるに法を設けて佛天の像を毀壞偸盜する者は不道を以て論じ、沙門道士のこの罪を犯せる者は惡逆を以て論ぜしめ、又民に令して、戸毎に錢を出して經像を建立せしむ。民間の佛經六藝の籍よりも多し。これより佛像の設供は寺院の外普く庶民の家に行はれ、開皇、仁壽の間造像の盛なること前古に比なし。煬帝も亦多く佛寺を建て、故像一十萬一千軀を修治し、新像三千八百五十軀を造立せられき。されば彫像の名手の印度より來れるもあり。開皇間の匠人婆羅門僧眞達その名を今に傳ふ。遺品存するもの亦少からず。窟崖の諸像中、龍門には僅に伊闕佛龕碑傍の開皇十五年所造の阿彌陀

及賓陽南洞北壁の大業十二年所造の觀音像（第六十六圖。）等あるに過ぎずこ雖も、山東歷城には千佛山、玉函山及佛峪の諸龕あり。益都には雲門山、駞山の諸龕あり。東平には白佛山の摩崖あり。長淸には五峰山蓮花洞あり。その餘直隷には磁州の南響堂山摩崖及曲陽の黃山龕あり。河南には安陽の萬佛溝洞あり。像銘皆明に隋代の作たることを徵するを得。窟崖像の普及隆興眞に驚くべしこ爲す。個々の石像に至りては、遺作の傳世夥多なることこ寧ろ魏齊に過ぎたり。こゝに開皇二十年二月八日所造の玉石觀音像（第百九圖。）を掲げて作風の一斑を示す。無銘の觀音立像三軀、（第百十乃至第百十二圖。）倚像一軀（第百十三圖。）の如きも。嚴身の粗縟はあれご、像式略相同じ。蓋し皆隋朝の製こす。玉石像、四面像、碑像及石天宮、石浮圖等の流行は、依然こして前代の如く、殊に玉石像には頗る大像あり。塑像、夾紵像、檀像等の盛に造られしことも、茲に史傳に考ふべし。像の尊種は觀音最も多し。佛像の印相も、定印は尙間、兩手を前後に重ねしこと千佛山の龕像に見るが如くなれご、既にしてこれを上下に重ねたる後世普通の定式に爲すに至りぬ。雲門山及五峰山蓮花洞の諸像以てこれを徵すべし。觸地印及說法手も亦漸く後世普通の印相に同じきを見ること、駞山の龕像の如く、如來の項相は螺髮漸く多し。衣態も佛像の內衣を胸前に帶結せるもの、及左肩より懸れる紐に吊れて袈裟の裏反りたる形の如きも、隋に至りて始めて出で來れり。並にこれを千佛山、雲門山、駞山、五峰山等の諸像に見るべし。技術の樣式も從ひて變化し、元魏の遺風は既に全く迹を絕ち、面貌豐溫和圓滿こ爲り、衣褶の彫法も寫實の巧大いに進みて、妥帖流麗の美を加へ、座前垂下の皺襞復齊周の諸像こ同じからず。菩薩像も天衣の垂樣、裙褶こ相和して頗る流暢なり。唐式の早く既に隋代に胚胎せるを認む。こゝに於いて我が國古代の彫刻を顧みるに、これ等の諸像こ年代を同じうする推古天皇時代の像式は、東魏、高齊の典型を傳へたるものなること、先にその相似を說けるが如く、却りてその隋式に非ざるを知るべし。惟ふに最初我が國には三韓より傳へたるにて、三韓は隋代尙魏齊の舊式に依りしが爲なるべし。飛鳥時代に至りては、直接唐こ交通してその風を傳へ、謂はゆる隋式は終に殆ご我が國に行はれずして止みしなり。

金銅小像の遺品は隋代の物最も多し。これ即ち先に述べたる民家像設普及の致す所に外ならず。されぱその像式も從ひて變化し、種々の新樣を生じぬ。光項の化佛漸く廢れて、寶珠形、蓮瓣形、三尖形等の光背最も行はれ、挾侍の菩薩を著くるに、花莖を以て本尊の座邊に挿入し、又は別に挾侍、化生等を作りてこれを列べ、或は五尊、七尊を一具に作り、背に菩提樹を添へ、或は三尊の座を連ね、觀音の像式も曲腰に一種婉巧の形態を生ぜり。この種の鑄像の盛に行はるゝや、皇家の願造等には往々銀像、黃金像あり。石作に四面像行はるれば、銅像にも亦四面像造られき。而してこれ等の金像の銘は、古來皆その趺座又は光背に刻するを常こせしが、隋に至りては造寺、造像の石碑に倣ひ、螭首龜趺の小銅碑を作りて像背に著くること出で來ぬ。皆これ鑄像の隆興に伴へる變遷なり。

近年支那より傳へたる金石諸像の外、隋代に當りて日本に將來せられし金像少からざりき。法隆寺の寶物たりし謂はゆる四十八體佛の

如きは、悉く日本の製作にはあらで、その中恐らくは當時三韓を經、或は直ちに隋より傳へしものあらむ。その外にも推古朝の像と稱せらるゝものゝ中、亦多少支那作あるべし。今にして彼我の所作を區別せむは極めて難事なれど、盡くは日本作に非ざるべしとの推想は、具眼者の同じく首肯する所なり。その樣式日本作たることの明徵ある像に見ざる所のもの少からざるは、即ちこれが爲のみ。要するに支那彫塑史の研究には、これを參合せざるべからざること言ふを須ゐず。

鎚鍱像は我が國の謂はゆる押出佛なり。東晋太和中沙門竺道壹金牒の千像を造り、劉宋元徽中沙門法獻龜茲國に至り、金鎚鍱像を造りて齎し歸りしを以て、その文獻の最も古きものとし、その後絶えて史徵を得ず。又曾て支那にその遺品あることを聞かずと雖も、元魏、齊周を經て隋唐に至るまでも盛に作られけむことは、亦我が國にその照映を見るに由りて知らる。小墾田、飛鳥奈良朝の際、我が國にても製作せられ、正倉院にはその牡型かと思はるゝ物もありて、遺品も少からず。こも亦その中に或は支那製なきを保せざるなり。故を以て支那鎚鍱像の事を考ふるには、亦參照の必要あることを忘るべからず。たゞ鑄像よりも一層彼我の識別に困難なるのみ。

文帝は佛法を雅信し、道士に於いて蔑如たりきと雖も、開皇二十年の像設保護の法律は、均しく道像にも及ぼしゝことゝて、金石の遺作亦少からず。像式概して齊周に同じ。

佛道以外の彫刻には閻毗、何通等の名匠あり。何通の子何稠將作大匠たり。綠瓷を以て琉璃に擬すと言へば、綠瓷は隋世既にこれ有りしなり。されば近年出土の明器中見る所の綠瓷壺奩の屬には、或は隋代の物あらむ。浮彫の獸帶頗る巧妙なり。又隋の遺作と思はるゝものに鏡背の鑄飾あり。本書收載する所の四神十二辰鏡、（第百十四圖。）四獸鏡（第百十五圖。）及鳥獸花文鏡（第百十六圖。）の如きは、前出の漢晋諸鏡及後出の唐鏡と對照して、正に隋器なるべきことを識るに難からず。

唐代の佛像

李唐一代二百八十九年、劉漢の後、世代の久しきこと、これに及ぶものなく、初唐の世國運の隆盛前古に絶し、盛唐に至りて文物益〻粲然たり。惜むらくは肅宗の朝安史の亂後、河朔命に抗し、藩鎭黨援跋扈して復租を納れず。吐蕃、回紇、南詔の胡虜釁に乘じて邊陲を陷れ、德宗の世田悅、李納等先後反する者絶えず。奉天の一詔稍天下の心を得たりと雖も、間架除陌の税錢に民益〻困弊す。憲宗の初賢相位に在りと雖も、元和の政終に非なり。晩唐に至りては天下の事皆北司に決し、朋黨相鬩ぎ、その末豪傑競ひ起りて、以て終に五季の大亂を致す。貞觀開天の盛終に再たび見ること能はざりき。こゝを以て佛教の像設も初盛唐を以てその盛時とし、中晩唐に至りては甚しく衰頽せり。國運の盛衰の藝術の消長に關すること眞に著明なりと謂ふべし。されば支那古代の佛像史は、元魏の太和景明以來、李唐の開元、天寶に至る二百七八十

年間を以てその正紀と爲す。今先史傳に依りてその文獻を尋ぬるに、高祖武德七年傅奕上疏して釋敎を除去せむことを請ひて曰はく。天下の僧尼數十萬に盈つ。繒綵を剪刻し、泥人を裝束して厭魅を爲し、萬姓を迷惑すと。隋朝以來造像の盛なりしこと、以て察すべし。されば九年五月詔して京師に寺三所、觀二所を留め、その餘天平諸州に各〻一所を留め、餘は悉くこれを罷めしむと雖も、事竟に行はれず。太宗貞觀二年詔して建義巳來交兵の處、義士勇夫を身を戎陣に殞せる者の爲に各〻一寺を立て、文臣をして碑銘を爲りて功業を紀せしむ。盛大なる造像多かりしや必せり。貞觀十九年玄奘三藏印度より歸る。齎す所の銀像、金像、檀像七軀あり。これを弘福寺に安置し、後詔して大慈恩寺を建てゝこれを移す。送像の盛儀言語に絶せり。貞觀廿二年使人王玄策亦印度より歸る。その一行中巧匠宋法智と云ふ者あり。塑工に長じ、摩揭陀の佛足跡及菩提樹伽藍の彌勒像等を圖寫して歸る。巧に聖容を窮め、未だ京に到らざるに道俗競ひてこれを摸す。印度像式の影響顯著なること蓋しこれ等に由るならむ。太宗嘗て敕を下して佛像を賣ることを禁ず。その文中に、伎巧の家多く造鑄あり、供養の人競ひ來りて買贖すと言へり。當時佛像製作出售の狀を考ふるに足る。高宗顯慶元年河東郡夫人の戒を受くるや、勅して玄奘三藏及大德九人を鶴林寺に迎へ、授戒了りて後、巧工吳智敏に命じて十師の形を圖し、留めて供養せしむ。吳智敏は宋法智に次いで名を史傳に留めたる彫塑家なり。特に肖像に長じたりと見ゆ。塑士安生も亦高宗朝の名匠なり。僧法雲の五臺山菩薩頂に文殊眞容院を建つるや、安生法雲と共に懇禱し、光中に文殊の儀容を見て圖模塑成す。乾封二年道宣律師化す。高宗道風を追仰し、詔を下してその眞容を崇飾圖寫せしむ。相匠韓伯通これを塑績す。相匠と言へば殊に傳神の妙手なりしならむ。長安大雲經寺の塔は、隋の鄭法輪等の畫跡及韓伯通塑作の佛像あるを以て、三絶塔と稱せらる。伯通塑技の妙想ひ見るべし。睿宗先天元年慧能大師新州國恩寺に報恩塔を建つ。時に蜀僧方辯と云ふ者あり。來りて師に謁して曰はく。揑塑を善くすと。師色を正して曰はく。試に塑し看よ。方辯その旨を領せず。乃ち師の眞を塑す。高さ七寸許。曲さにその妙を盡す。師これを觀て曰はく。汝塑を善くして佛性を善くせずと。酬ゆるに衣物を以てす。方辯禮謝して去る。當時造像隆興して、僧中塑造を善くする者ありしを見るべし。方辯は蓋しその秀でたる者にして、慧能の禪には徹せざりしかど、塑工の名手として傳ふべきなり。開元、天寶の際道佛二教の盛に伴ひ、彫塑の妙工輩出す。その最も著れたる大家を塑像家楊惠之とす。開元中吳道子と同じく梁の張僧繇の筆迹を師として畫友たり。巧藝並に著る。然るに道子は東洛に浪迹せる時幸に明皇に知られ、召し入れられて內供奉と爲り、聲光獨り顯る。こゝに於いて惠之毅然として忿を發し、都べて筆硯を焚いて專ら塑作を肆にし、能く僧繇の畫相を奪ふ。乃ち天下の第一手として道子と衡を爭ふに至る。時人語りて曰はく。道子の畫、惠之の塑、奪ひ得たり僧繇の神筆路と。その世に稱歎せらるゝやかくの如し。而して惠之の畫亦頗る巧妙なりしことは、その千福寺東塔院の壁畫涅槃及鬼神圖の張彦遠の名畫記に錄せられたるにても考へらる。崑山慧聚寺に惠之塑する所の毘沙門天王及二侍女あり。形模生けるが如し。惠之又八萬四千手の觀音を爲るに、手を措くべからざるを以て千手眼を作る。後のこれを作る者皆

惠之を法とす。甞て義淨三藏土を呪し、惠之これを塑して楞伽山を造る。一切の諸蟲獸敢て至らずと云ふ。臨潼の福巖寺は開元中華清宮の餘材を以て修築せる寺にて、その佛殿の塑像は皆惠之の作る所なりき。同殿に又玉石像あり。天寶七載玄元皇帝華清宮の朝元閣に降見せるを以て、勅して閣南に降聖觀を立て、幽州の白玉石を琢して老君像を造る。福巖寺佛殿の像と共に成る。作者を元伽兒と云ふ。同佛殿に又塑脫空像あり。亦伽兒の作る所。惠之の作と共に能妙纖麗曠古儔なしと稱せらる。惠之伽兒と同時に員名、程進の二家あり。張彥遠曰はく、惠之は塑造を善くし。員名、程進は石像を彫刻す。並に畵迹も亦皆精妙なりと。又張愛兒と云ふ者あり。畵を吳道子に學びて成らず。便ち捏塑を事とす。明皇御筆を下してその名を仙喬と改む。雜畵蟲像亦妙に至る。吳道子も亦時に塑作を爲しき。東京相國寺の文殊、維摩は道子の裝塑と傳へたり。さればその弟子にも塑作に長じたる者獨り張仙喬のみならで、西京菩提寺東門の塑神は吳生の弟子王耐兒の工なりき。光明寺に鬼子母及文惠太子の塑像あり。擧止態度生けるが如し。その工名を李岫と云ふ。成都寶相寺偏院小殿の中に菩提像あり。纖塵凝らず。新に塑するもの丶如し。初め造る時匠人依明堂まづ五臟を具し、次に四肢百節を作る。李岫、依明堂も亦共に盛唐の名工なり。天寶十二載西番諸國の兵涼州を侵し、その城を圍む。玄宗不空三藏に勅して祈らしむ。帝香爐を秉りて側に在り。不空誦咒二七遍。忽ち神兵の甲を帶び戈を荷ひて道場の前に現る丶あり。帝不空に問ふ。これ何の神ぞ。不空對へて曰はく、北方毘沙門天王の第二子獨健なり。天兵を領し、請に應じて敵に赴く。故に來り辭するのみと。既にして西涼奏す。神兵城の東北雲中に現じ、敵兵畏懼して皆退き、城北門樓上に毘沙門天王身を現じて光明を放つ。その天王神樣表に附して進上すと。帝因りて勅を諸道の節鎭所在の州府に下し、各城の西北隅に於いて毘沙門天王の形像を安置せしめ、又佛寺をして別院に天王像を安置せしむ。これよりして毘沙門の像設天下に普く、唐末五季に至るも造立頗る行はる。大曆四年不空の奏に依り、勅して天下佛寺食堂中賓頭盧尊者の上に文殊像を置いて上座と爲さしむ。印度及西域大乘僧伽藍の風を取れるなり。この像は謂はゆる聖僧文殊にして菩薩形には非ず。同七年又不空の奏に依り、勅して京城及天下僧尼寺內に各一勝處を揀び、文殊菩薩院を置かしめ、州府の長官に命じて修葺し、文殊像を塑して裝飾綵畵し、功畢れば各畵圖を具して奏聞せしむ。こゝに於いて文殊菩薩の像設亦天下に偏し。武宗會昌五年勅して天下の佛寺を廢す。毀拆する所の寺四千六百餘所、還俗する所の僧尼廿六萬五百人。寺材は以て廨驛に用ゐ、金銀の像は度支に付し、鐵像は以て農器を鑄、銅像、鐘磬は以て錢を造らしむ。これを會昌の滅法とす。大滅法の第三回なり。この時御史を分遣して天下の廢すべき寺を檢し、金銀の佛像を收錄す。蘇監察と云ふ者あり。兩街の諸寺を巡覆し、銀佛の一尺已下なるものを見れば、多くこれを神として歸す。人これを蘇杠佛と云ふ。さればこの時官吏の奉佛に依り、又は藏匿の爲に難を免れし金像も少からざりしならむ。大中二年佛法を復し、懿宗奉佛、時に眞檀像一千軀を造りしこと等あれど、造像の盛は終に再たび舊時に復するに及ばずして止みき。洞窟摩崖の造像も唐に至りて亦極めて盛なり。龍門の龕窟は隋代造像極めて寥々たりしが、初唐の世再たび魏齊に讓らざる隆興を致せ

り。その中在來の洞壁に龕像を彫出せるは賓陽南洞を主とす。前出同洞北壁圖第六十六圖。中に見ゆる貞觀廿二年思順坊老幼等所造の彌勒像の如きは即ちその一なり。古陽洞、藥方洞等にも亦初唐の造像あり。新に鑿造せられたる洞窟は、先賓陽北洞の北に羅鼓洞あり。これ蓋し太宗の第四子魏王泰がその母文德順皇后長孫氏の爲に造る所にして、即ち賓陽洞外に刻したる伊闕佛龕碑は、この洞の鑿造と賓陽洞修補との事を錄したるものに外ならず。宋の歐陽修以來、この碑を以て賓陽洞鑿造の碑と爲すと雖も、賓陽三洞は元魏の所造なること先に述ぶる所の如くなれば、魏王の新造は羅鼓の一洞のみなること明なり。洛陽縣志に旁に飛泉ありて、風激すれば即ち響應すと曰へり。羅鼓の名蓋しこれに本づく。洞中の三尊及神王像、その樣式賓陽洞の元魏風と異なりて、雄渾莊麗なる初唐の作風に成れり。本書揭ぐる所、左右の挾侍菩薩像第百十七及第百十八圖。以てこれを觀るべし。伊闕佛龕碑は貞觀十五年に刻する所なれば、この洞蓋し同年の所造ならむ。蓮花洞の北、王公路と刻したる石標ある所の一洞には、永徽元年の造像銘あれば、洞亦高宗朝初の鑿造ならむ。敬善寺龕亦同年代に成れりと見ゆ。像銘の最も古きもの顯慶三年及五年あり。紀國太妃韋氏の造像も亦この龕に在り。則天武后嘗て、龍門に幸し、群臣に命じて詩を賦せしめ、先成る者に錦袍を賜ひ、東方虬これを拜したるに、宋之問の詩次いで成り、その詞愈、高かりしかば、奪ひて之問に賜ふ。蓋しこの敬善寺に於けりし事ならむ。敬善寺は潛溪寺の南に在り。龕淺くして大なれば、東崖よりして望み見るべく、昔はその前に屋宇を構架して寺を造りしなり。これと龕狀相似て更に大なるを奉先寺龕とす。咸亨三年武皇后脂粉錢二萬貫を賜ひ、西京實際寺の善道禪師等をして檢校せしめ、以てこの大盧舍那像龕を造り、上元二年功畢る。本尊像高八十五尺、龕高百四十尺、縱廣十二丈。記文中に正教東流してより七百餘歲、像龕の功德たゞこれを最と爲すと曰へるは、實に誇張に非ざるなり。規模の巨壯敬善寺も復及ばず。寺閣の構架は僅にその材孔を存じて早く亡びぬと雖も、像は略依然として儼存せり。本尊盧舍那佛の左右に二菩薩、第百十九圖は左方挾侍。二天王、第百廿圖は左方天王。二金剛第百廿一圖は左方金剛。あり。壁上に又立佛の諸龕あり。像式の壯麗眞に天下の偉觀たり。張九齡の撰文に係る牛氏像龕碑及明皇御製の內侍高力士、楊思勗等造像碑亦この龕に在り。開元十三年明皇こゝに行幸あり。杜甫が奉先寺に遊ぶの詩以て當年の景勝を想像するに足る。智運洞は沙門智運が永隆元年鑿造する所にして、當陽坐佛五尊像の外、後壁には化佛、飛天を造り、左右兩壁面に小佛一萬五千身を彫出せり。第百廿二圖。洞頂天蓋の蓮花瓣に銘記を刻す。本尊の華座頗る新式を出せり。洞口に獅子第百廿三圖。あり。智運洞下に又無名の一洞あり。儀鳳三年の造像銘あれば、亦初唐の鑿造ならむ。龍門山と相對する伊闕の東崖香山にも石窟あり。神龍元年中宗香山寺に幸し、李白、楊巨源、韋應物皆香山寺に遊ぶ詩あり。白居易亦久しくこゝに寓す。惟ふに香山寺石窟の鑿造は、前諸洞より年代稍後れて、初唐末乃至盛唐に在るべし。その第一洞の佛像第百廿四圖。の寶冠を著けたるは蓋し盛唐の新像式なり。第二洞の佛像第百廿五圖。及挾侍菩薩像第百廿六圖。亦皆然り。並に前出の諸像と作風を異にす。我が國奈良朝の作に比較して以てこれを識ることを得べし。上述の外、龍門の唐代造像は銘記に依りて徵すべきも甚だ多し。その中作者の名の知らるもの、石作張珂及匠人張和あり。龍

門の外河南には尙鞏縣の石窟寺、安陽の萬佛溝、孟縣の高德崖等、亦初盛唐の造像多し。山東には歷城の千佛山及佛峪、益都の駝山及雲門山、東平の白佛山等、前代に續きて造像絕えず。更に寧陽の石門房山、長淸の靈巖寺等、唐代新に興れる窟崖あり。直隷には隋代に始まれる南響堂山の唐に入りても造像少からざるのみならず、同じ磁州の北響堂山、及唐山の宣霧山は、初唐に至りて摩崖の造像亦興り、盛唐に至るまで銘記の徵すべきもの極めて多し。たゞこれ等東方の諸洞崖は、開天の交を以て終末こし、爾後造像殆ご絕ゆ。これに反して四川の諸崖は廣元の千佛崖を初めこし、綿州、簡州、巴州、資州、南江、大足等、中唐晚唐に至りて造像却りて盛なり。蓋し東方の流行漸く西邊に及ぼしゝものか。されば燉煌の千佛巖も、隴西の李氏に依りて、武周以後中晚唐益〻修造の盛を致せり。竝びに銘記、碑文に徵すべし。西本願寺が燉煌より獲たる塑造像の菩薩第百卅七圖。及聲聞第百卅八圖。の二像は、何れの洞より出でしやを知らずと雖も、中晚唐の物なることはその作風に由りて考へらる。窟崖以外の箇々の石像も唐代の遺作甚だ多し。本書收載する所、太宗朝の物には貞觀十三年中書舍人馬周所造の靑石佛坐像第百廿九圖。あり。高宗朝の物には總章元年所造の彌陁五尊交龍碑像、第百卅圖。咸亨三年所造の彌陁像、第百卅一圖。同四年所造の二級龕像、第百卅二圖。儀鳳三年所造の彌陁五尊像第百卅三圖。及雍州同官縣武定村碑像第百卅四圖。あり。交龍碑像は李盛鐸氏の所藏こ聞く。武定村碑像は陝西三原學署衙門觀音廟に在り。銘文年月を缺くこ雖も、同官縣の雍州に屬せるは、貞觀十七年より天授二年まで、及大足元年より先天元年までにて、開元元年には雍州は京兆府こ爲りしなれば、この像の成る、蓋し亦高宗朝に在り。藝風堂金石目これを儀鳳三年こ爲せるは、舊拓又は側背の拓本に、或は年月の徵すべきものあるか。中宗朝の物には神龍元年所藏の彌陀像第百卅五圖。及景龍二年所藏の彌勒三尊白玉石像第百卅六圖。あり。後者は背に七佛の刻畫及銘記を彫し、左側に多寶塔、右側に藥師如來、上面に花文を刻せり。これ等の外、武周乃至開元の造像にして最も貴重なる遺品の我が國に傳はれるは、西安寶慶寺壁間に在りし靑石半出像十數軀の、近年早崎天眞君に依りて將來せられたるものあり。本書載する所高延貴所造の彌陀三尊像以下の十四軀即ちこれなり。その中高延貴の彌陀、第百卅七圖。韋均の彌陀、第百卅八圖。蕭元昚の彌勒、第百卅九圖。李承嗣の彌陀、第百四十圖。及沙門德感の十一面觀音第百四十一圖。は長安三年に成れり。この餘尙寶慶寺に遺れるもの王璿所造の彌陀、姚崇所造の佛像ありて、共に長安三年の所造たり。この七軀はその銘文より考へて、光宅寺七寶臺の爲に造れるものなることを知る。光宅寺は唐の皇城東光宅坊橫街の北に在りき。武后こゝに七寶臺を置く。臺甚だ高顯、これに登れば四もに眼界を極む。王璿、姚崇はその名唐書に出づ。沙門德感は高宗、武后に敬重せられたる翻經の大德にして、七寶臺を造る檢校たりしこと、この造像の銘にて知らる。姚元景所造の彌勒第百四十二圖。は長安四年に成り、光宅寺法堂の爲にその石柱に於いて作りしものなり。元景は姚崇の兄にしてその名又唐書に見えたり。德感の所造こ酷似せる十一面觀音像の寶慶寺に在りしもの尙三軀第百四十三乃至第百四十五圖。あり。蓋し同じく長安前後の作ならむ。皆端嚴流麗の美、初唐藝術の好標本ならざるはなし。開元十二年內侍虢國公楊思勗の新莊楊花臺の佛殿に造れる石佛二軀も寶慶寺に在りしもの、亦共に早崎君の將來に係れり。その一彌勒像下に序文を刻し、他の一なる釋迦

像（第百四十六圖）の下には銘を刻せり。內侍馮鳳翼等所造の釋迦像（第百四十七圖）は、題名のみを刻して年月を缺くと雖も、その銜名に依りて、前二軀と略同年代の作なることを知る。とも寶慶寺より傳へたるものにて、蓋し亦楊花臺佛殿の爲に造られしものか。この餘尙寶慶寺所傳の無銘石像三軀あり。その一菩提樹下の釋迦（第百四十八圖）及彌勒像（第百四十九圖）は、共に前出長安、開元の諸像に類したれば、蓋し亦その頃の所造なるべく、寶冠を著けたる彌陀像（第百五十圖）は開元以後の制なるべし。以上寶慶寺諸像の外、我が國に流傳せる唐代の石像亦少からず。坐佛白玉石像一軀（第百五十一圖）は先の神龍元年の彌陀に類し、一軀（第百五十二圖）は座式頗る智運洞の本尊に類せり。地藏菩薩像（第百五十三圖）亦然り。佛坐像一軀（第百五十四圖）は座式香山寺洞に似たり。又石佛像にしてその背二扇の屛風の如く、兩傍に挾侍又は供養者像の刻畫あるもの少からず。こゝに掲ぐる二軀（第百五十五及第百五十六圖）の如きは即ちこれなり。後者は定印の上に鉢を持つ。技術の樣式は共に初唐に屬せり。西安香城寺舊藏の菩薩坐像（第百五十七圖）の如きも亦盛唐の一遺品なるべし。

木像は唐代の遺作殆ど獨り我が國に傳存せり。初唐の頃よりして、檀龕寶相と稱し、檀木もて龕と共に佛菩薩等の像を細彫せるもの頗る行はる。乾封の遺文に、盧照鄰の作れる相樂夫人檀龕寶相讃あり。弘法大師將來の刻白檀佛菩薩尊像一龕（第百五十八圖）は即ち一の檀龕なり。今俗に枕本尊と呼びて高野山金剛峰寺の國寶たり。彌陀淨土の相を圖し、挾侍菩薩、聲聞、獅子、化生に至るまで細巧を極む。同山普門院及嚴島神社の國寶にもこれに類したる檀龕あり。共に亦弘法大師の將來と傳稱せり。蓋し皆中唐頃の製作ならむ。慈覺大師の請來品にも涅槃淨土、西方淨土及僧伽誌公邁廻三聖像の檀龕ありしかども、今に存せざるを惜む。慧運の請來に係る五大虛空藏菩薩像は東寺觀智院に在り。こゝにその業用（第百五十九圖）、金剛（第百六十圖）の二軀を掲ぐ。慧運は慈覺大師と共に大中元年の歸朝なれば、この像蓋し中晩唐の作なり。支那に殆ど絶無なる木像、密教像の唐代遺品を我が國に見るは、頗る珍重すべき快事なりとす。

小銅像は唐に至りて復行はれず。遺品甚だ稀なり。然れども初唐の頃には前代の遺風として往々製作せられ、小銅碑の傳世少からず。これに反して瓦甎像は唐に至りて最も盛なり。謂はゆる善業泥は蓋し貞觀、永徽頃の物なるべく、又永徽已來僧法津が多寶佛六十八万座を造れるが如き、皆これを遺品に徵することを得。本書載する所の千佛（第百六十一圖）は背に、大唐千佛寺とあり。千佛寺は濟南に在りて、貞觀中建てる寺なれば、この甎像亦當年の物ならむ。立佛（第百六十二圖）は背に印度佛像、大唐蘇常侍等共作とあり。これと同銘の甎像にして、法津の多寶塔に酷似せるものあれば、とも亦永徽前後の作なるべし。その餘坐佛雙塔、（第百六十三圖）羅漢、（第百六十四圖）地藏、（第百六十五圖）觀音、（第百六十六圖）坐佛、（第百六十七圖）立佛及化佛、（第百六十八圖）倚佛三尊（第百六十九圖）等皆年代の明徵を缺くと雖も、共に初盛唐の遺作なるべきこと、これを我が橘寺、岡寺等出土の甎像に對較して、略これを考ふることを得べし。

李唐の宗室はその姓老子と同じきを以て、道士これを利用して朝家の信仰を高め、老君を追尊して玄元皇帝と稱し、道館、道像の設前代よりも盛なることを致す。されば終南の道宣も道像盛なりと曰へり。開元廿九年玄宗夢に老君を見、その告に由りて眞容を得しより、兩京及諸州に詔して、各〻玄元廟を置かしめ、天寶三載又兩京及諸州郡に詔し、官銅を以て佛及天尊の像各〻一軀を造らしむるに至りて、その盛を極む。太清宮の成るや、太白山の白石を採りて玄元の聖容を造り、又白石もて玄宗の眞容を造りて玄元像の右に侍立せしめ、後又名臣及文宣王等の像を刻して左右に列せしむ。天寶七載驪山華淸宮降聖觀に白玉石の老君像を造らしむ。作者元伽兒の事は上に述べたり。かくの如く道敎の崇奉盛なりしを以て、初盛唐の間に成れる天尊老君の石像は遺品今に多く、銘記徵すべきもの少からず。こゝに影片を掲げたる乾封三年、弘道二年、開元十三年及天寶九載所造の天尊像四軀(第百七十乃至第百七十三圖。)以てその作風の概を觀るに足る。その中弘道二年の造像は即ち交龍碑像なり。三脚の挾軾を用ゐたる像式、全く宇文周以來の定型にして、技術は皆佛像に及ばず。

陵墓の儀飾及碑碣

陵墓の儀衛表飾は、唐に至りて遺物少からず。太宗昭陵の六駿像(西安醴泉縣に在り。)弘太子恭陵の石獅(河南緱氏縣に在り。)よりして外、高宗の乾陵(西安奉天縣に在り。)武氏の順陵(西安咸陽縣に在り。)睿宗の橋陵(西安蒲城縣に在り。)肅宗の建陵(西安醴泉縣に在り。)德宗の崇陵(西安雲陽縣に在り。)憲宗の景陵(西安蒲城縣に在り。)等、皆石人獸を存ず。何れも雄大壯嚴なる巨像なり。今その一例として順陵の石獅子二軀(第百七十四及第百七十五圖。)を掲ぐ。天授元年則天武后その父武士彠を追尊して孝明皇帝と云ひ、母を皇后と云ひ、その墓を順陵と號せしこと兩唐書に見えたれば、この石獸も天授頃の製作なり。初唐藝術の精美を歎賞するに足る。唐禮將作大匠に屬して門下省に甄官署あり。琢石、陶土の事を掌どる。その石作の類には石磬、石人、石獸、石柱、碑碣等あり。その石は出づるに方土あり。用ゐるに物の宜しきあり。皆これを辨じて適せしむ。上記諸陵の石人獸は、即ち皆甄官署石作工匠の手に成れるものなること言ふを待たず。而して石人、石獸の類は、三品以上六を用ゐ、五品以上四を用ゐる。されば臣下の墓にも石人獸の尙今に存ずるものあり。陵墓儀衛の人獸に非ざる小石像にして、道佛二敎の攝に非ざるもの亦間〻これを存す。こゝに掲ぐる白玉石の阮咸を彈ずる美人像(第百七十六圖。)の如し。この像の髮容服飾全く正倉院の鳥毛立女屛風に同じく、阮咸の形制亦同院の寶器に同じきを以て、初盛唐の遺作なること疑なきを知る。碑碣の制は唐禮五品以上皆碑を立つることを得。碑は螭首龜趺にして趺上の高さ九尺に過ぎず。七品以上碣を立つ。圭首方趺にして、趺上の高さ四尺に過ぎず。若し隱倫道素、孝義著聞の者あれば、仕へずと雖も亦碣を立つ。墓碑の外又功業を錄する碑あり。こゝを以て唐碑の今に存するものは甚だ多し。昭陵陪冢の諸碑の如きこれなり。今唐碑の例として、永徽元年の左監門大將軍樊興碑、(陝西三原學署に在り。第百七十七圖。)永徽四年の大唐三藏聖敎序碑(西安慈恩寺大雁塔壁に在り。第百七十八圖。)及建中二年の大秦景敎流行中國碑(西安碑林に在り。第百七十九圖。)を掲ぐ。碑頭の龍矩製作極めて精妙にして、その趣致森嚴崇高なり。これを前出の魏碑

に比して變遷を考ふべし。この中聖教序碑は佛像碑を兼ねたるものにして、題額の下に七尊一具の佛像あり。下邊に歌舞の天女を彫出し、兩邊の花文亦甚だ美なり。唐碑彫飾の尤品とす。

唐俑

唐禮明器の制、三品以上九十事、五品以上六十事、九品以上四十事を用ゐる。埏馬偶人その高さ各一尺。その餘音樂隊、僮僕の屬及威儀服玩は、各生前の品秩にこれに應ぜしめ、有らゆるもの瓦木を以てこれを作る。その長さ率ね七寸を定めとせりき。皇家の明器は甄官署これを作り、東園署これを藏す。功臣密戚の葬には東園の秘器を賜ふを常とせり。初唐末より葬儀次第に浮侈を致し、令式の定制を紊る。太極元年左司郎中唐紹上疏して曰はく、近者王公百官競ひて厚葬を爲す。偶人、像馬雕飾生けるが如し。徒に以て路人に眩耀す。本心に因りて禮を致すならず。更に相扇慕し、產を破り貧を傾け、風俗流行、遂に下士庶を兼ぬ。若し禁制するなくば奢侈日に增さむ。望むらくは諸王公以下送葬の明器皆令式に依り、並に墓所に陳し、衢路に行ることを得ざれと。制してこれに從ふと雖も、この風俗は終に止まずして益甚しかりしものゝ如し。されば封氏聞見記に曰はく、玄宗の朝海內殷贍、葬を送る者或は衢に當りて祭を設け、帷幕假花、假果粉人、麪粻の屬を張施す。然れども大いさ方丈に過ぎず、高さ數尺に過ぎざりしが、識者猶或はこれを非とせり。喪亂以來この風大いに扇し、祭盤帳幕高さ八九十尺、牀を用ゐること三四百張、雕鐫飾畫伎巧を窮極すと。盛唐中唐の際、葬儀の奢れることを以て見るべし。咸通十一年八月同昌公主薨じてこれを東郊に葬るや、懿宗淑妃と延興門に御し、內庫の金玉駝馬、鳳凰麒麟、各高さ數尺なるを出して以て儀と爲し、その衣服玩具、人と異なることなし。一物以上皆一百二十舁に至る。木を刻して樓殿鳳凰、花木人畜の象を爲れるもの勝げて計るべからず。これ固より異常なりと雖も、葬儀の華麗晩唐に至りても尙盛に行はれしことを知るべし。されば埏馬偶人の屬唐代の物とおぼしき遺品少からず。支那人はこれを古藝術の作品として鑒賞することを解せざりしが、淸末汴洛鐵道の敷設工事に方りて、端なく發掘せられしもの、日本人及西洋人の爲に善價もて購はれしかば、爾來頻りにこれを發掘する者ありと見えて、北京の骨董賈これを收め、我が國に舶載せるもの亦少からず。並に皆唐以上の製作に係るものゝ如し。たゞ恨むらくは發掘墳墓の年代、所在等を詳にせざるを以て、鑒別考證甚だ難し。今たゞ一括してこゝに掲ぐ。その中釉なきもの最も古く、素釉のものこれに次ぎ、綠釉又これに次ぎ、黃綠等の彩釉を用ゐたるもの最も新にして、唐代の制なるべく、就中その作精妙にして且長大なるは、即ち葬事の最も侈りたる盛唐乃至中晩唐の物ならむ。然れども、これ必しも定鑒と爲すべからざるは、世代同じと雖も、喪家の貴賤貧富に由りて、制に粗縟あり、工に巧拙あること言ふを須たざればなり。異日發掘墳墓の地理、年歷明確なるものゝ出で來るを待ちて、次第に研究を重ね、然る後始めて不磨の定說を立つべきのみ。五雜俎に、洛中の人漢唐時の墓を掘りて得たるものあり。

多く陶器なり。色たゞ淨白にして形質甚だ粗なりと曰へるも、素陶の俑を以て漢晋の物と爲すに似たり。本書收載する所の諸俑中釉なくして設色したるものは、

立女。第百九十圖。　騎馬人物。第百九十七圖。
同。第百九十一圖。　十二支の午。第二百一圖。
辟邪。第百九十二圖。

等あり。素釉を用ゐ、又はその上に設色したるものは、

文官。第百八十一圖。　同。第百八十七圖。
立人。第百八十三圖。　鞍馬。第百九十九圖。
同。第百八十四圖。　駕牛。第二百圖。
立女。第百八十五圖。　犬。第二百二圖。
同。第百八十六圖。　鳧。第二百五圖。

等あり。綠釉を用ゐたるものには、

武人。第百八十二圖。

あり。種々の彩釉を用ゐたるものには、

立人。第百八十圖。　馬及胡人。第百九十五及第百九十六圖。
立女。第百八十八圖。　駝及胡人。第百九十三及第百九十四圖。
同。第百八十九圖。　馬。第百九十八圖。

等あり。又一色の赭釉を用ゐたるものには、

豕。第二百三圖。　羊。第二百四圖。

あり。この餘歌舞奏樂の女俑等少からず。これ等の諸俑を通覽してこれを考ふるに、俑は概して僕婢、六畜等の外、富貴の人の葬には、謂はゆる生の品秩に視て、文武の從官臣屬を備へ、又車輦、歌舞奏樂等をも列せしなり。その大いさは大概六典の一尺乃至七寸を度とす。間〻更に長大なるもの第百八十、第百九十三、第百九十五圖。あるは、典禮紊れ葬事侈れる頃の物なるべし。俑の釉色の中、綠釉は隋世既に有りしこと上に説けるが如く、黃綠の彩釉は、我が正倉院尙藏の器皿に由りて、唐代の物なることを證すべし。無釉の俑にても、前出の立女第百九十、第百九十一圖。の如きは、亦初盛唐の風俗

を寫したるものなるべき正倉院の鳥毛屛風の立女と、髪容服裝全く相同じければ、盛唐頃の物なること疑なし。この種の女俑にして、頰上に粧點を著けたるは、即ち唐代婦人の化粧に流行せる靨鈿なり。鳥毛屛風の立女亦これを著けたり。又前出諸俑中駱駝と馬とを牽ける二人物第百九十四及第百九十六圖。は、胡人胡服なること明なれど、人は胡に非ずして服の胡なるものあり。惟ふに漢武西域を開きてより、大秦以東諸民族の支那との交通行はれ、殊に隋世蠻夷の朝貢する者多く、大業三年冬、都下に大戲を催し、四方の奇伎異藝を徵して端門外に陳せしことあり。煬帝の時、西域の諸國悉く張掖に至りて交市す。唐代に至りては、波斯の商舶廣府の來往極めて盛なり。されば後漢の靈帝は胡服、胡帳、胡牀、胡坐、胡飯、胡箜篌、胡笛、胡舞を好み、貴戚皆競ひてこれを爲し、晋泰始の後、相尙びて胡床、貊槃を用ゐ、貴人富室必ずその器を畜へ、吉凶嘉會皆以て先と爲し、大康中胡產の氈毹を以て絈頭及絡帶、袴口と爲し、唐開元以來、太常の樂胡曲を尙び、貴人の御饌盡く胡食を供し、士女皆競ひて胡服を著る。天寶の初め、貴族及士民好みて胡服、胡帽を爲し、婦人は即ち步搖釵を簪して衿袖窄小なり。前出立女俑の窄袖なるもの第百八十五乃至第百八十七圖。は即ち胡服なり。十二支は往々人身獸首に作りて、壙中の本辰位に列べたり。前出の午第二百一圖。の如きはその一例なり。牛は牛車に駕したるもの多し。前出の一牛第二百圖。その好標本たり。俑の製作の技術は巧拙種々なりと雖も、葬儀奢り、俑の令式を紊りて長大と爲れる頃の作に、最も巧妙なるものを觀る。前出の立人、第百八十圖。馬及駱駝第百九十三、第百九十五圖。の如きは即ちこれなり。並に盛唐の藝術を鑒賞するに宜しとす。

唐鏡

唐代金工の遺品は魚符及鏡を主とす。魚符は未だ佳品を得ざるが故にこれを敍せず。鏡は遺品頗る我が國に多し。その背飾は六朝より一變して彫技益精巧を加へ、最も好みて鳥獸背、蒲萄背を作り、以て空前の美を示せり。その鳥獸浮彫の技、今尙及び難しとす。蒲萄背を以て漢鏡とするが如きは、考古の學精しからざりし頃の說にて、固より取るに足らず。我が正倉院尙藏の諸鏡、多くは盛唐時の舶載なるべきに考へ、且前出漢晋の年號鏡に比較して、以てこれを知るべし。今佳品數種を收載して鑒賞に資せむとす。

鳥獸蒲萄背圓鏡。第二百六圖。

同。第二百七圖。

十二辰背圓鏡。第二百八圖。

鳥花背圓鏡。第二百九圖。

鳥獸花背八角鏡。第二百十圖。

鳥獸背圓鏡。第二百十一圖。

月桂背八角鏡。第二百十二圖。

この餘盤龍背、山水人物背等、浮彫の技觀るべきもの固より少からず。五代以後の彫塑に至りては、文獻少からずと雖も、遺品の考査未だ備はらざるを以て、今にして敍述すること難し。故にこれを後賢の研究に待ちて、爰に本書編述の筆を擱すと云爾。大村西崖述。

第百圖　河淸元年造坐佛三尊石像

高八寸九分

東京　黑田太久馬君藏

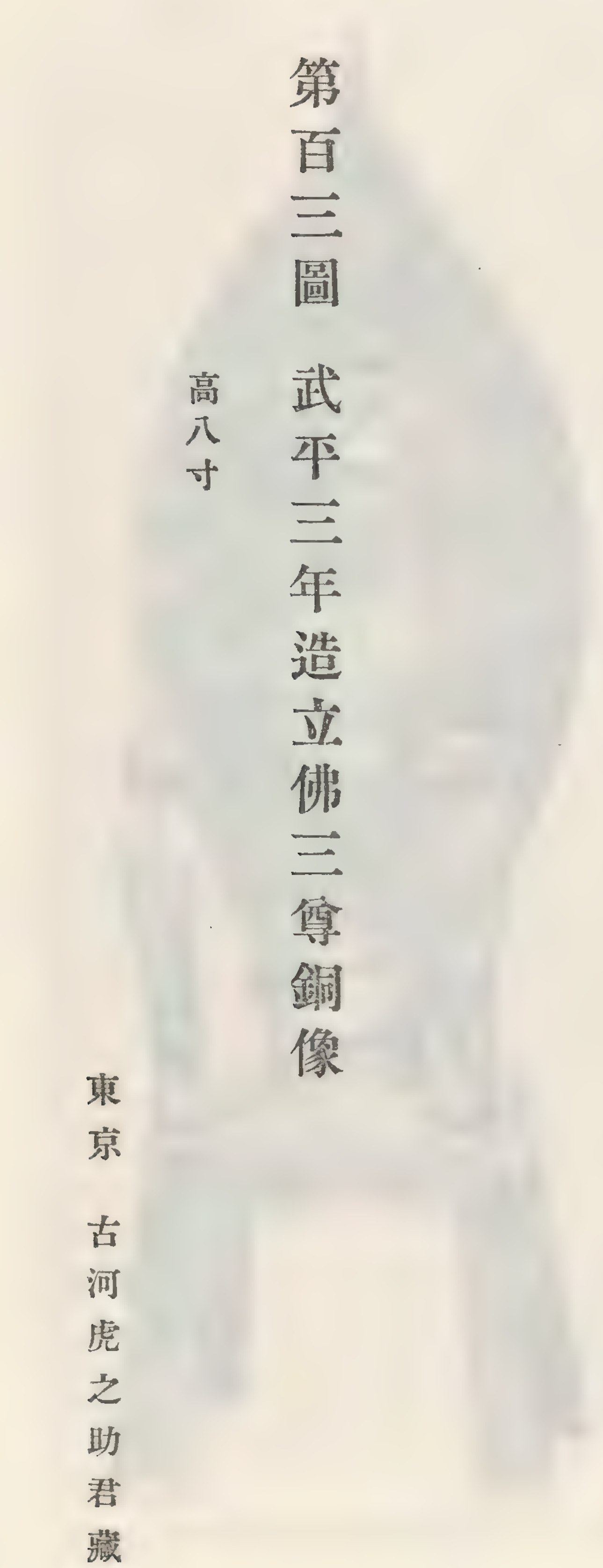
第百一圖　建德元年造坐佛三尊玉石像

高一尺三寸九分

第百二圖　坐佛石像

高一尺三寸

東京　早崎稉吉君藏

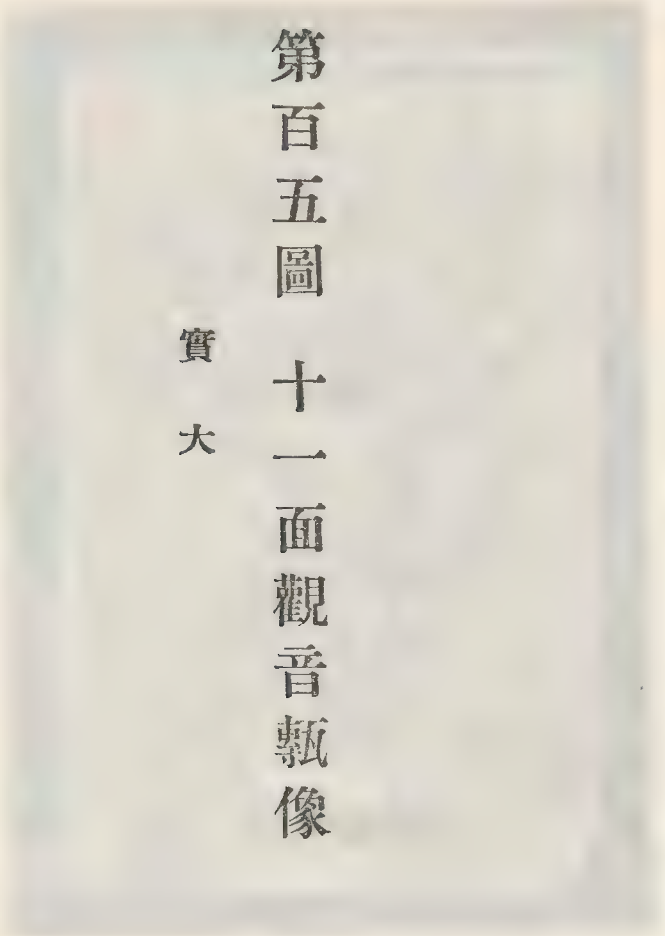


第百三圖　武平三年造立佛三尊銅像　高八寸

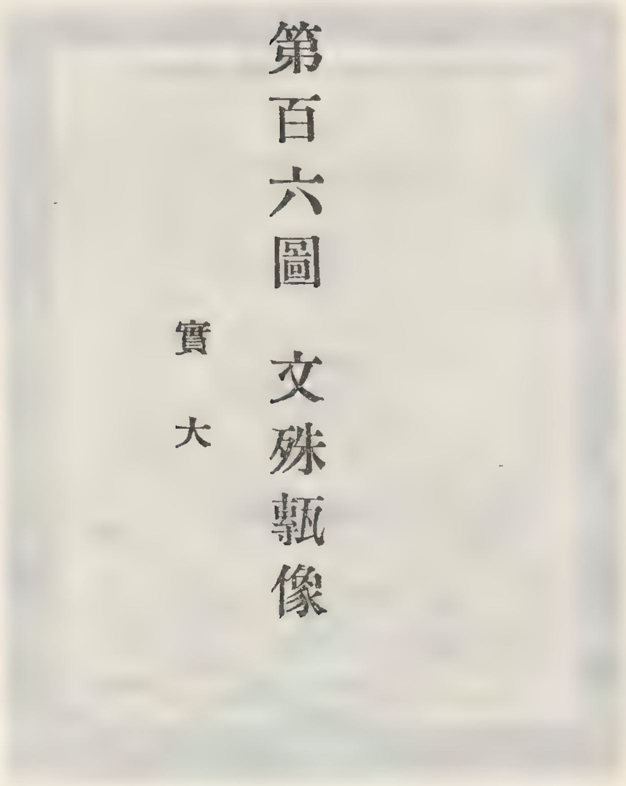
東京　古河虎之助君藏

第百四圖　武平十年造坐佛三尊銅像　高四寸五分

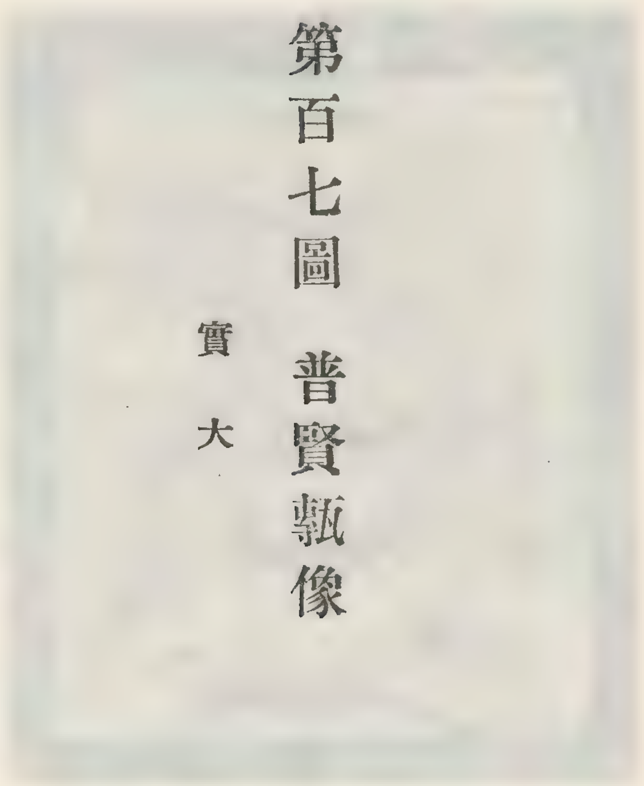
橫濱　原　富太郎君藏



第百五圖　十一面觀音甎像　實大

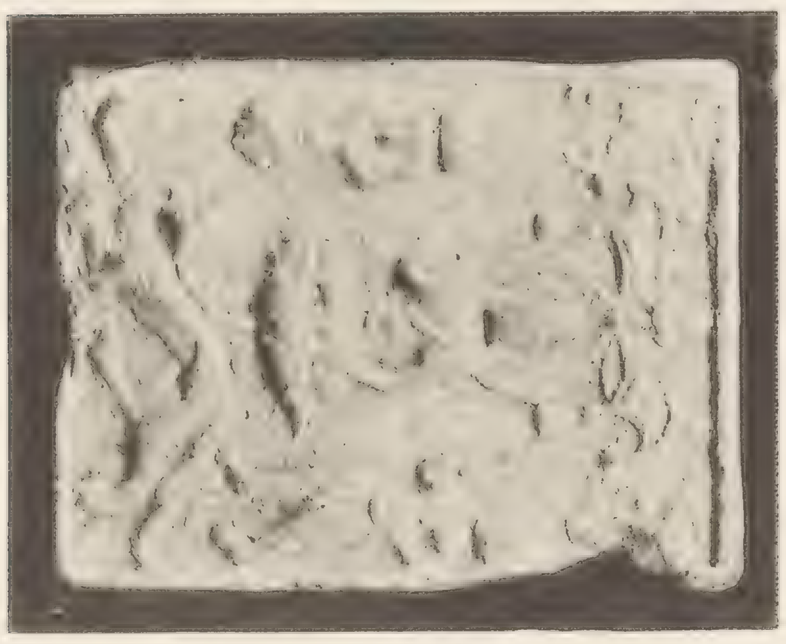


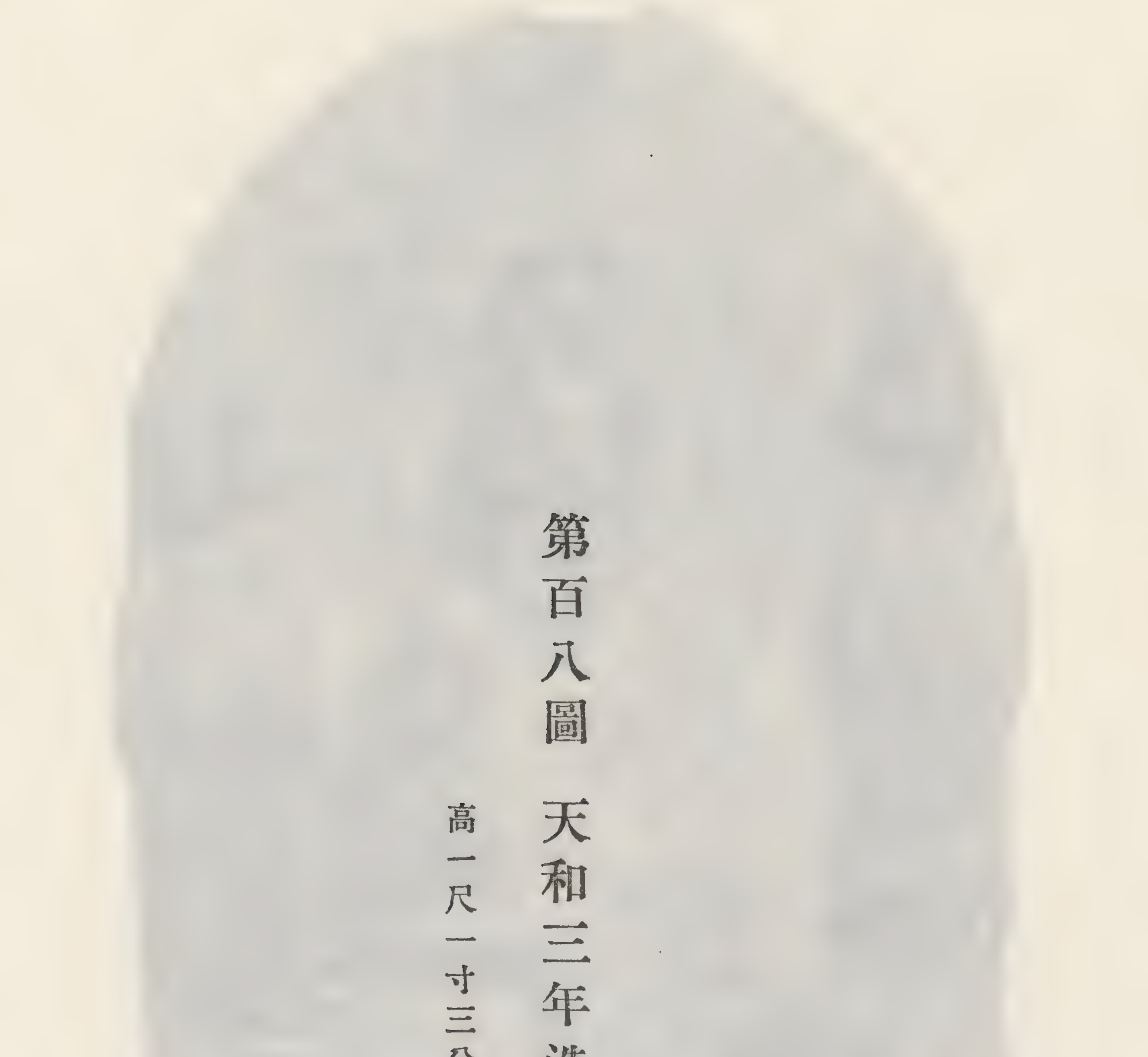
第百六圖　文殊甎像　實大



第百七圖　普賢甎像　實大

東京　早崎稉吉君藏





第百八圖　天和三年造老君石像

高一尺一寸三分

東京美術學校藏

第百八圖　天保三年[illegible]

高一尺一寸三分

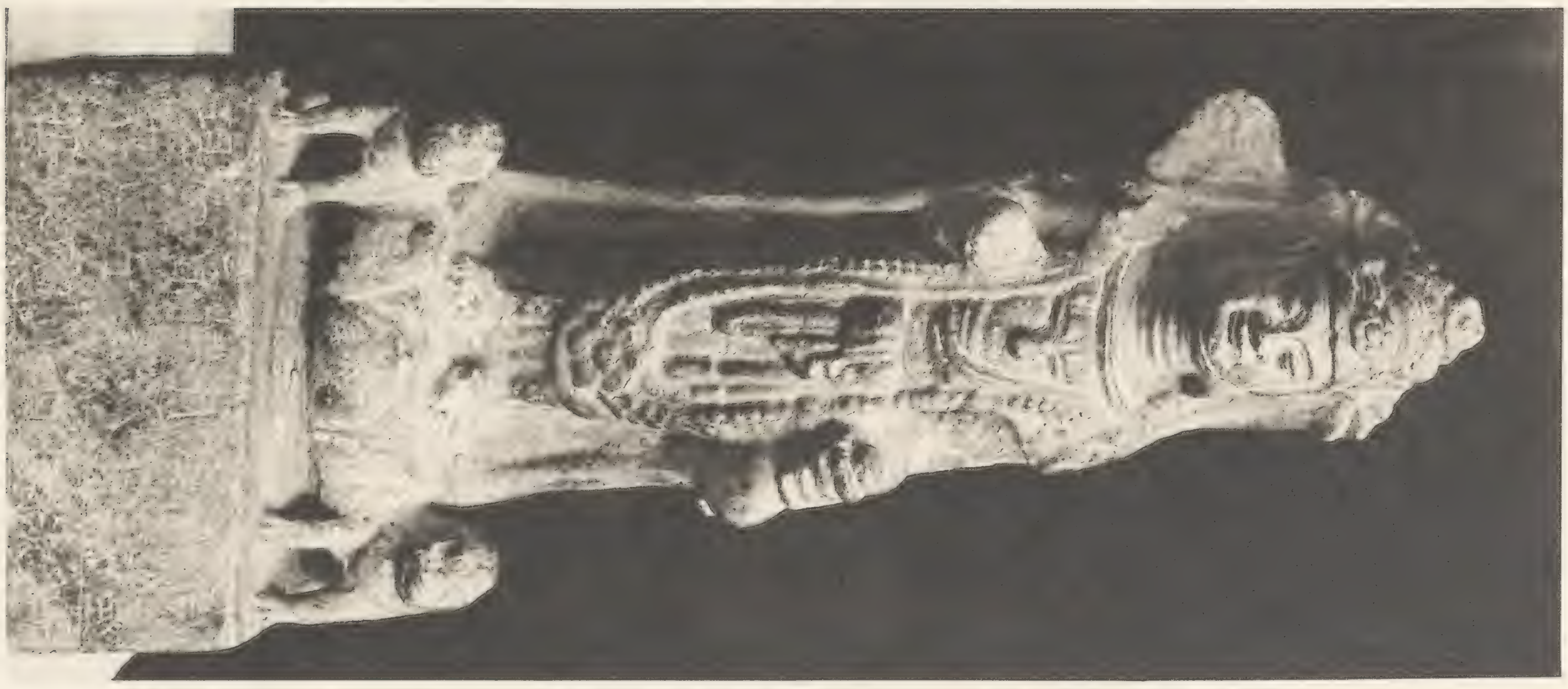
[illegible]

第百九圖　開皇三年造觀音石像
高七寸七分

第百十圖　觀音石像
高一尺二寸四分

第百十三圖　觀音倚像
高一尺三寸八分

東京　早崎稉吉君藏



第百十一圖　觀音石像

高二尺五分

福岡　伊藤傳右衛門君藏

第百十二圖　觀音玉石像

高一尺三寸

東京　早崎稉吉君藏

第百十四圖　四神十二辰鏡

徑八寸二分

東京　竹內金平君藏

第百十四回　岡崎十二段目

[illegible]

東京　[illegible]

第百十五圖　四獸鏡

徑六寸二分

東京帝國大學文科大學標本室藏

第百十六圖　鳥獸花文鏡

徑五寸六分

東京　竹内金平君藏

第百十五圖 [illegible]

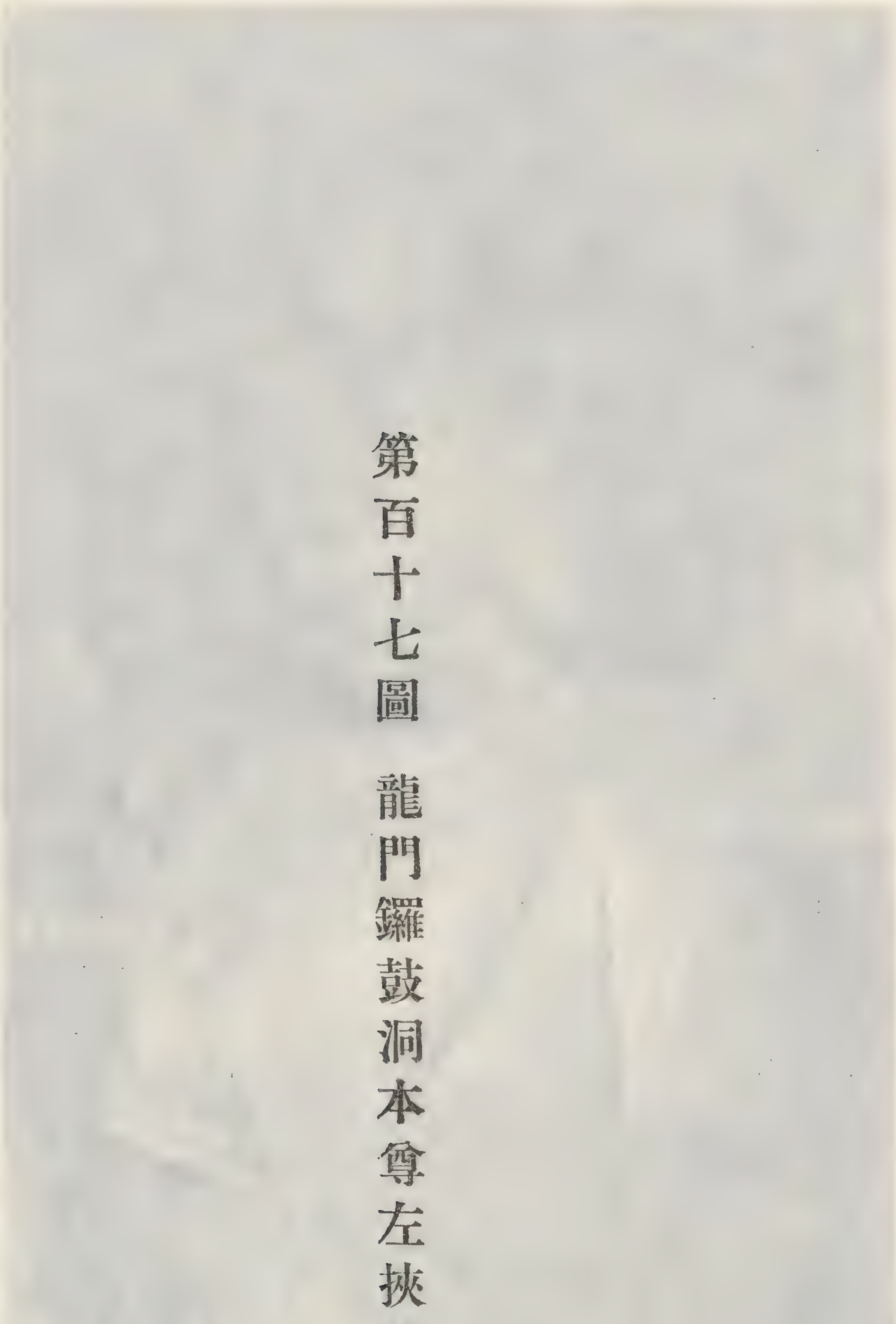
約六分ノ一

東京帝國大學文科大學史料編纂掛藏

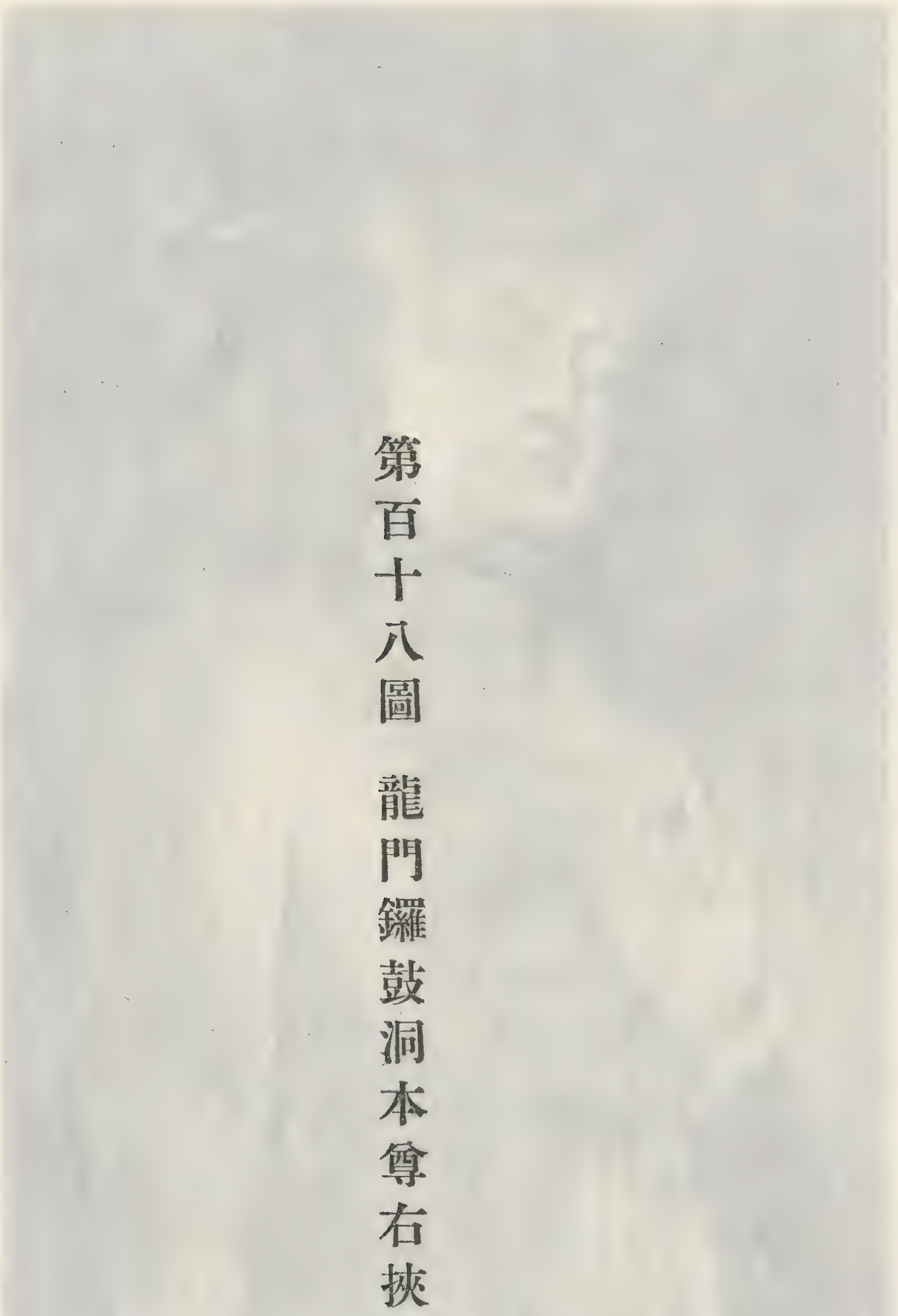
第百十六圖 [illegible]

約五分ノ一

東京 [illegible]藏



第百十七圖　龍門鑼鼓洞本尊左挾侍菩薩像



第百十八圖　龍門鑼鼓洞本尊右挾侍菩薩像

東京　早崎稉吉君寫眞

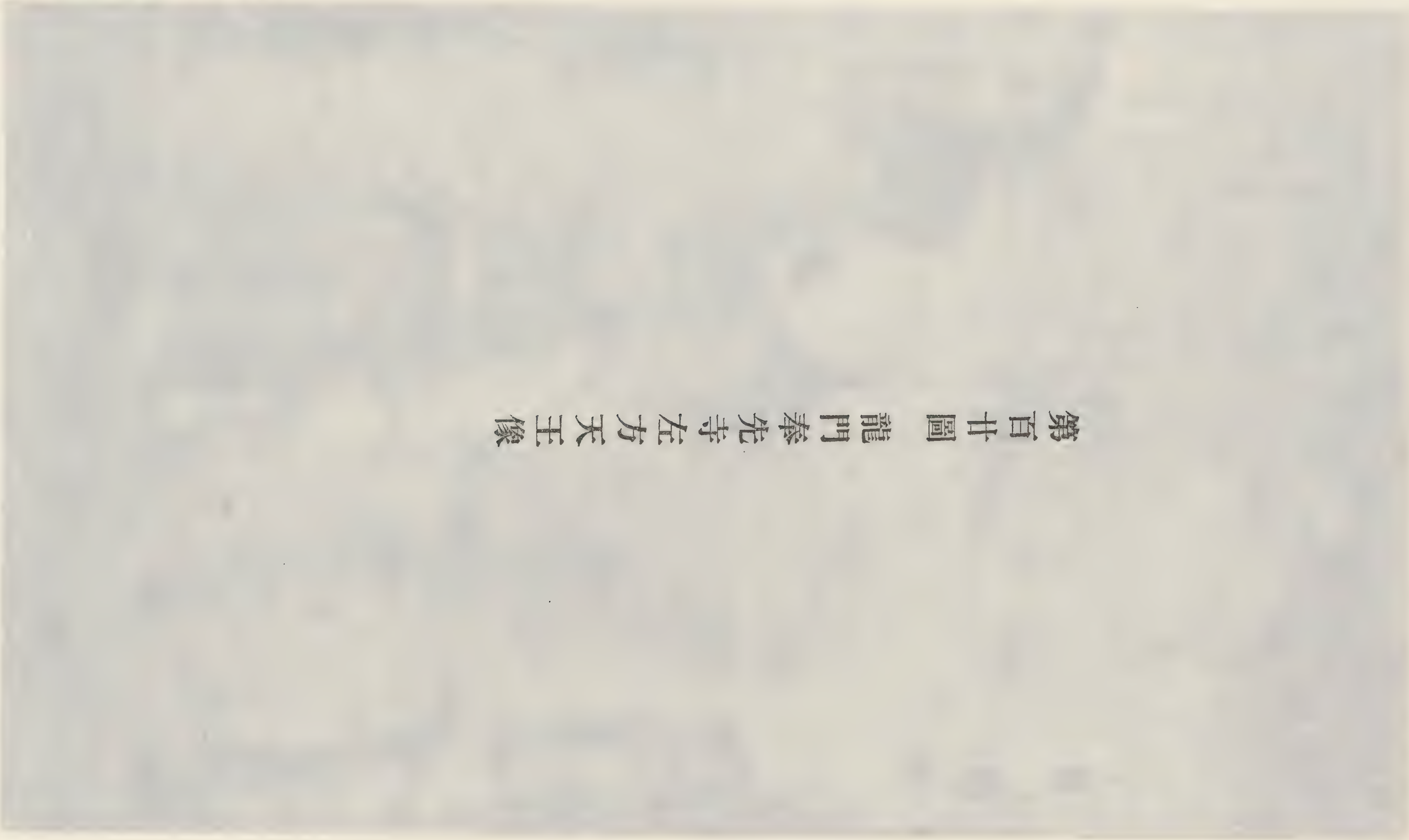
第百十九圖　龍門奉先寺盧舍那佛左方挾侍菩薩像

東京　早崎稉吉君寫眞

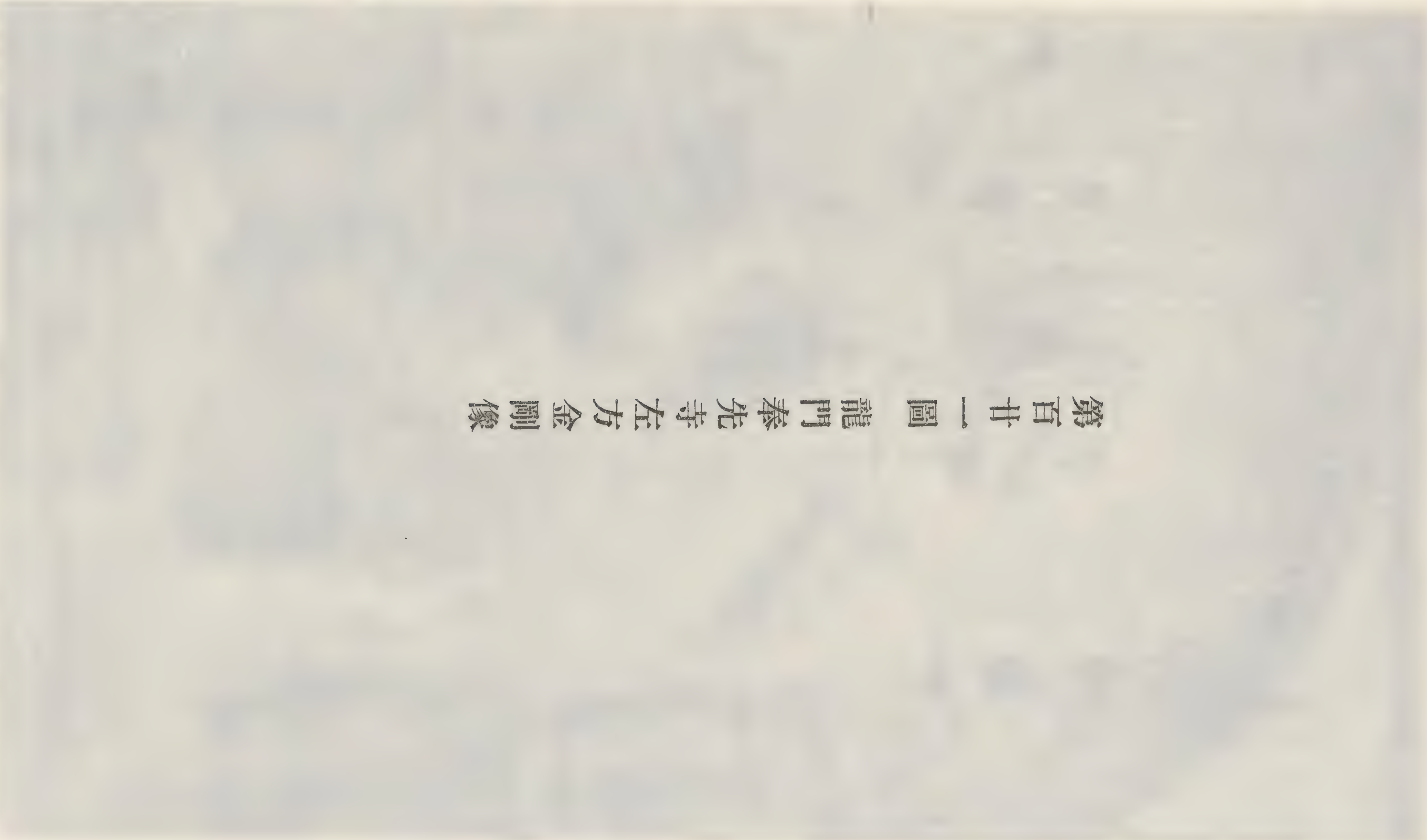
第百十五圖　龍門奉先寺盧舍那佛左脇侍菩薩

唐代　河南省洛陽縣

東京　早崎稉吉君藏

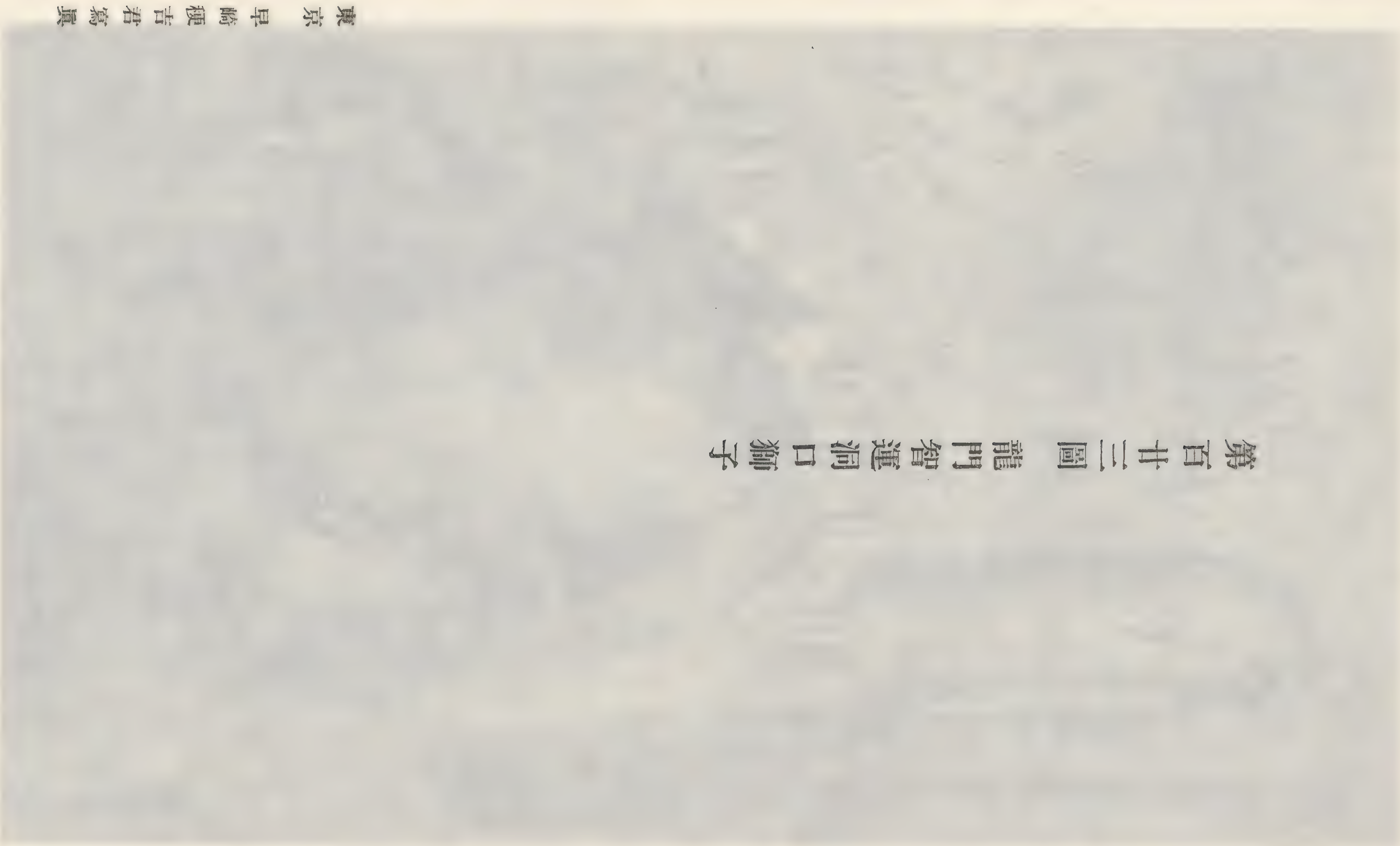


第百廿圖　龍門奉先寺左方天王像



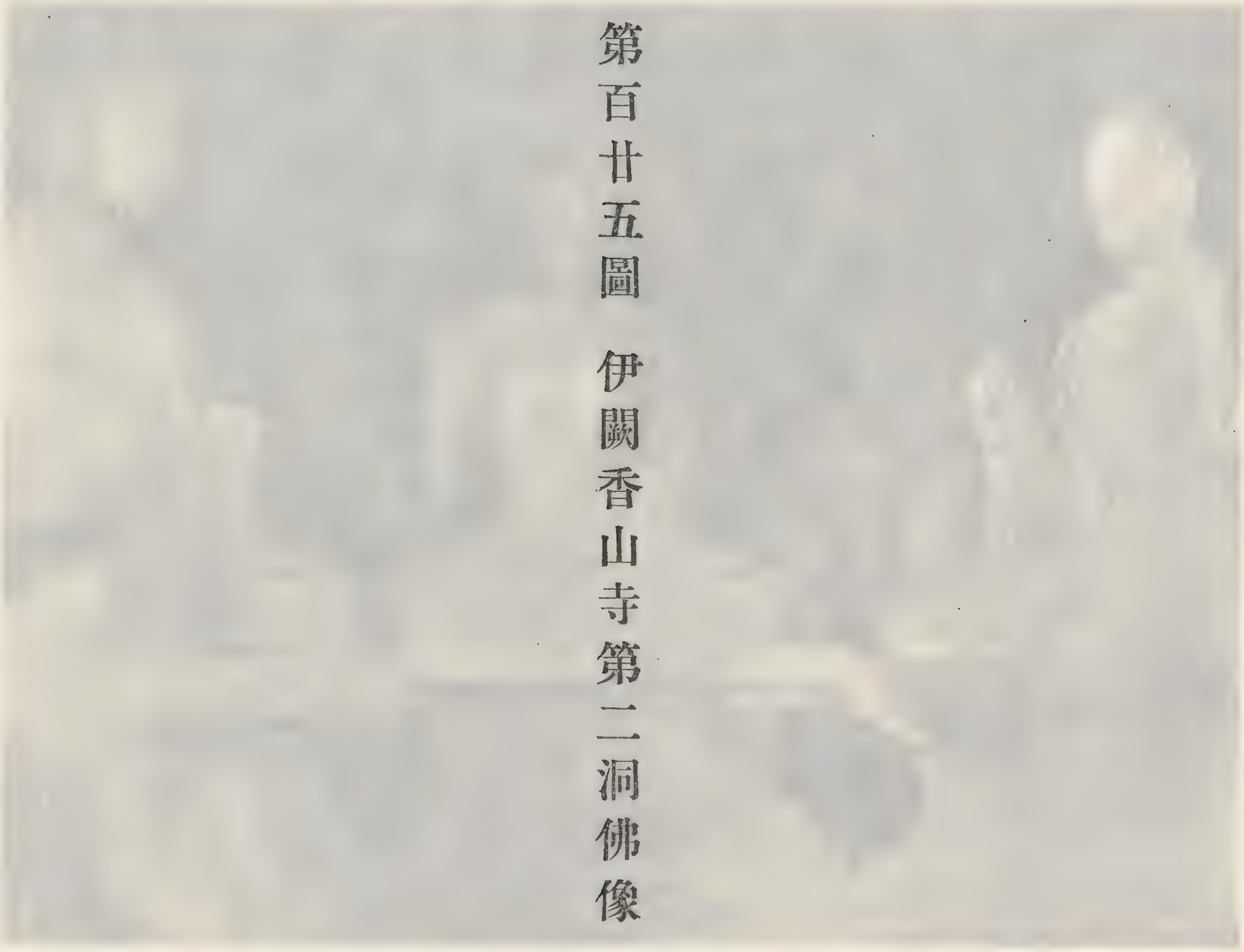
第百廿一圖　龍門奉先寺左方金剛像

東京　早崎稉吉君寫真



第百廿三圖　龍門智運洞口獅子

第百廿二圖　龍門智運洞諸像



第百廿五圖　伊闕香山寺第二洞佛像

第百廿四圖　伊闕香山寺第一洞佛像

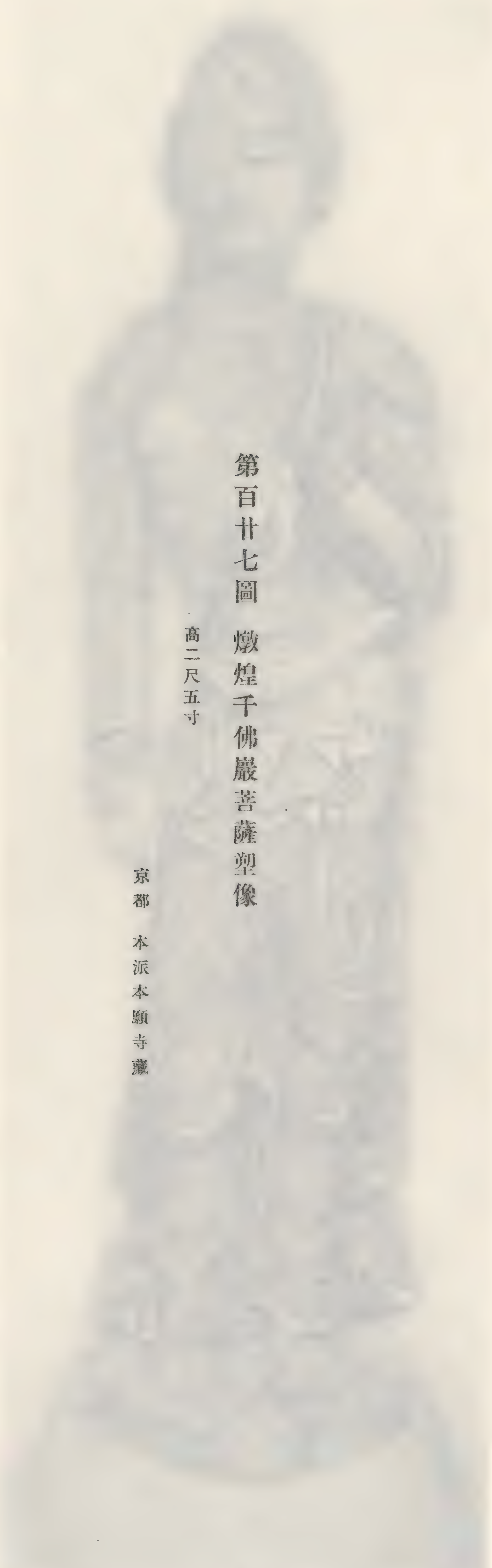
東京　早崎稉吉君寫眞

第百廿六圖　伊闕香山寺第二洞挾侍菩薩像

第百廿六圖　時圓香山寺第二窟天井藻井

第百廿五圖　時圓香山寺第二窟附近

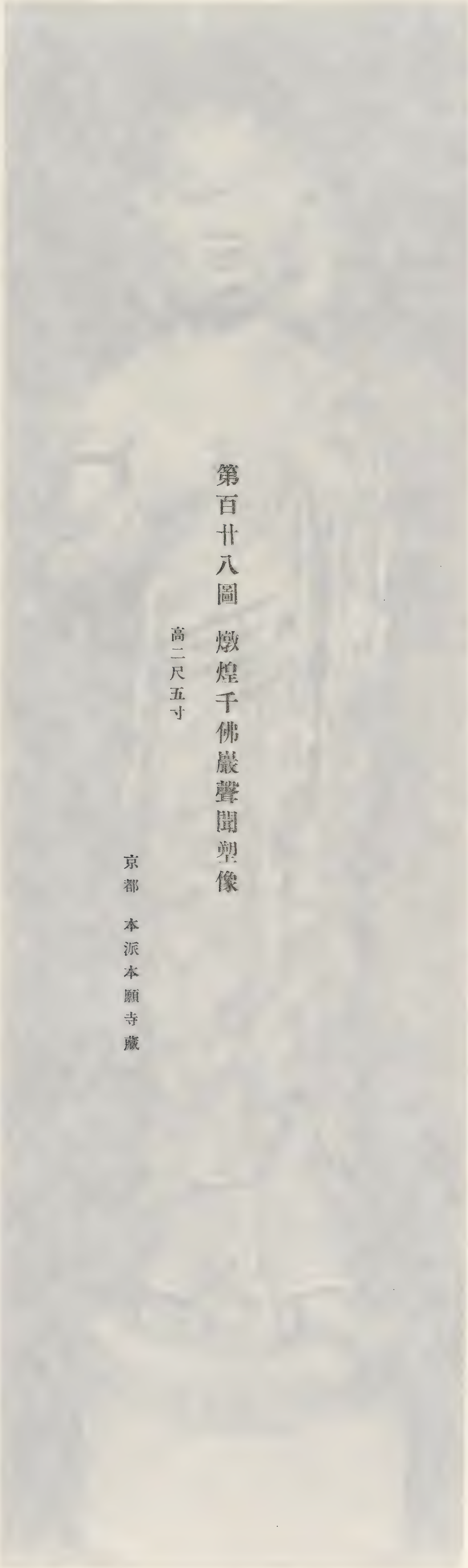
第百廿四圖　時圓香山寺第二窟附近



第百廿七圖　燉煌千佛巖菩薩塑像

高二尺五寸

京都　本派本願寺藏



第百廿八圖　燉煌千佛巖聲聞塑像

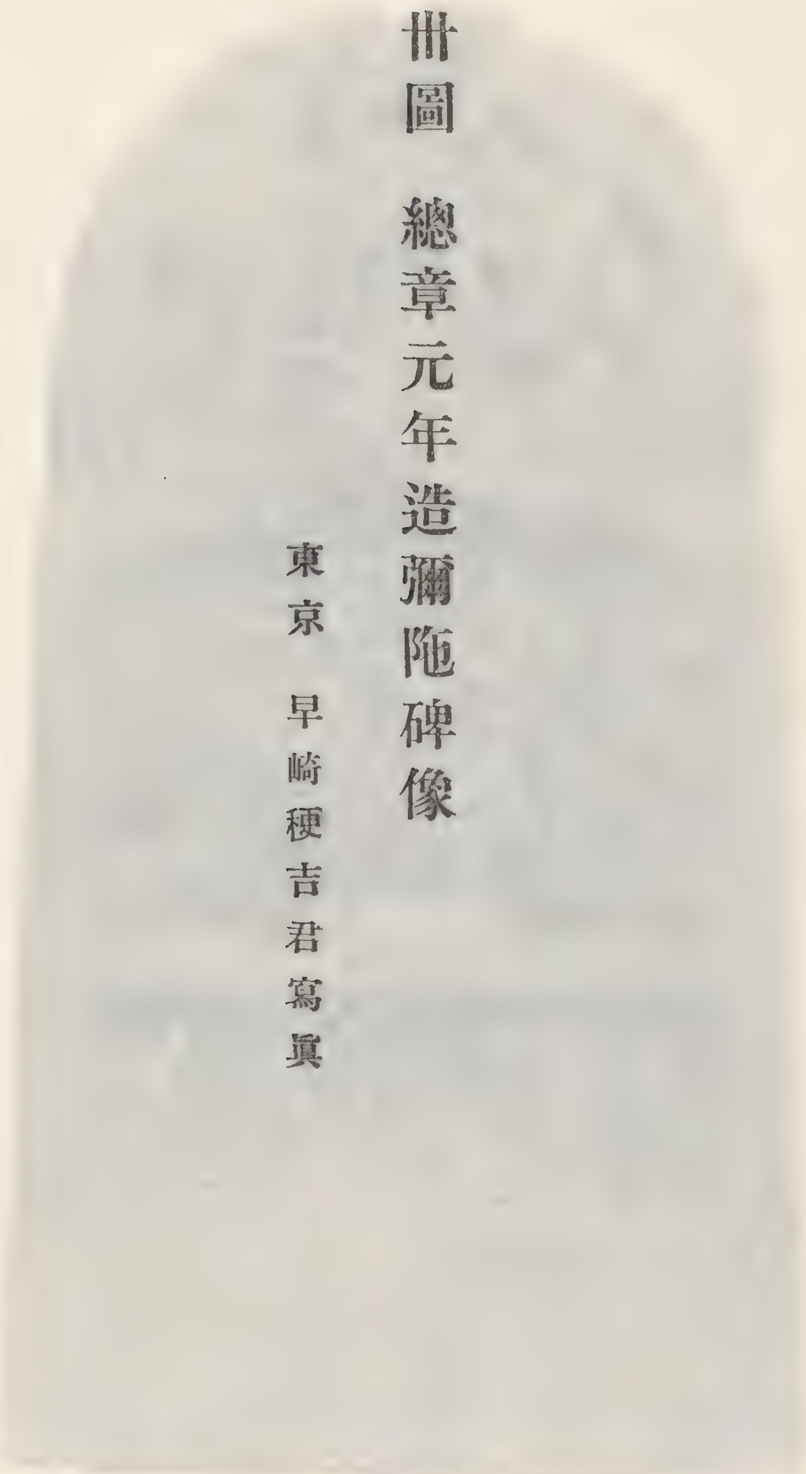
高二尺五寸

京都　本派本願寺藏

第百廿九圖　貞觀十三年中書舍人馬周造佛青石像

高二尺七寸五分

東京　鈴木直三郎君藏



第百卅圖　總章元年造彌陁碑像

東京　早崎稉吉君寫眞

第百卅二圖　咸亨四年造二級石龕像

高一尺五寸五分

東京　黒田太久馬君藏

第百卅一圖　咸亨三年造彌陀石像

高二尺四寸

東京　早崎稉吉君藏

第百卅三圖　儀鳳三年造彌陁五尊石像

高一尺六寸

東京　老田太文君藏

第百卌四圖　雍州同官縣武定村碑像

東京　早崎稉吉君寫眞

第百卅五圖　神龍元年造彌陁石像

高二尺五寸一分

東京　早崎稉吉君藏

第百卅六圖　景龍二年造彌勒三尊白玉石像

高七寸三分

東京　和田幹男君藏

第百卅七圖　長安三年高延貴造彌陀三尊石像

高三尺六寸二分

東京　早崎稉吉君藏

第百卅八圖　長安三年韋均造坐佛三尊石像

高三尺六寸

東京　早崎稉吉君藏

第百卌九圖　長安三年蕭元眘造彌勒三尊石像

高三尺六寸四分

東京　早崎稉吉君藏

第百四十圖　長安三年李承嗣造彌陀三尊石像

高三尺六寸四分

東京　早崎稉吉君藏

第百四十一圖　長安三年德感造十一面觀音石像

高三尺六寸、上半身を示す

東京　早崎稉吉君藏

第百四十二圖　長安四年姚元景造彌勒三尊石像

高三尺六寸三分

東京　早崎稉吉君藏

第百四十三圖　十一面觀音石像

高三尺六寸

横濱　原　富太郎君藏

第百四十三圖　十一面觀音石佛

高三尺六寸

新羅　[illegible]　[illegible]

第百四十四圖　十一面觀音石像

高三尺六寸五分、上半身を示す

東京　早崎稉吉君藏

第百四十四圖　十一面觀音坐像

第百四十五圖　十一面觀音石像

高三尺八寸、上半身を示す

東京　早崎稉吉君藏

第百四十六圖　開元十二年揚思勗造坐佛三尊石像

高三尺六寸五分

橫濱　原　富太郎君藏

第百四十七圖　馮鳳翼等造坐佛三尊石像

高三尺六寸

東京　早崎稉吉君藏

第百四十八圖　坐佛三尊石像

高三尺六寸三分

東京　早崎稉吉君藏

第百四十九圖 倚佛三尊石像

高三尺六寸三分

東京 早崎稉吉君藏

第百五十圖　寶冠彌陀三尊石像

高三尺六寸

東京　早崎稉吉君藏

第百五十一圖　坐佛石像

高一尺六寸

東京　早崎稉吉君藏

第百五十二圖　坐佛白玉石像

高二尺四分

東京　早崎稉吉君藏

第百五十三圖　地藏白玉石像

高一尺二寸一分

東京　早崎稉吉君藏

第百五十四圖　坐佛白玉石像

高一尺三寸五分

東京　早崎稉吉君藏

第百五十五圖　釋迦白玉石像

高一尺三寸三分

東京　早崎稉吉君藏

第百五十六圖　釋迦石像

高一尺一寸八分

東京帝室博物館藏

第百五十七圖　菩薩白玉石像

高一尺五寸四分

東京　早崎稉吉君藏

第百五十八圖　彌陀刹土檀龕（枕本尊）

高野山　金剛峰寺藏

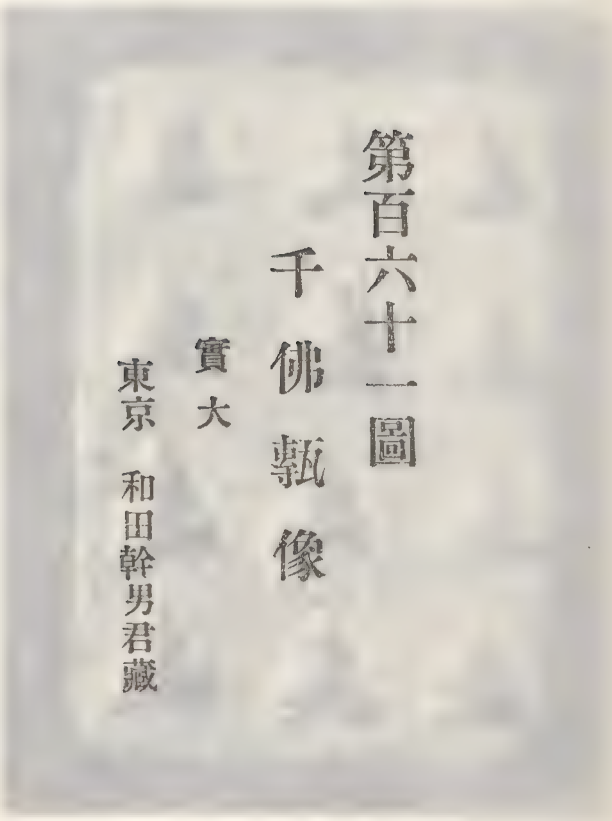
第百五十八圖　鐵瓶陶土器 共蓋

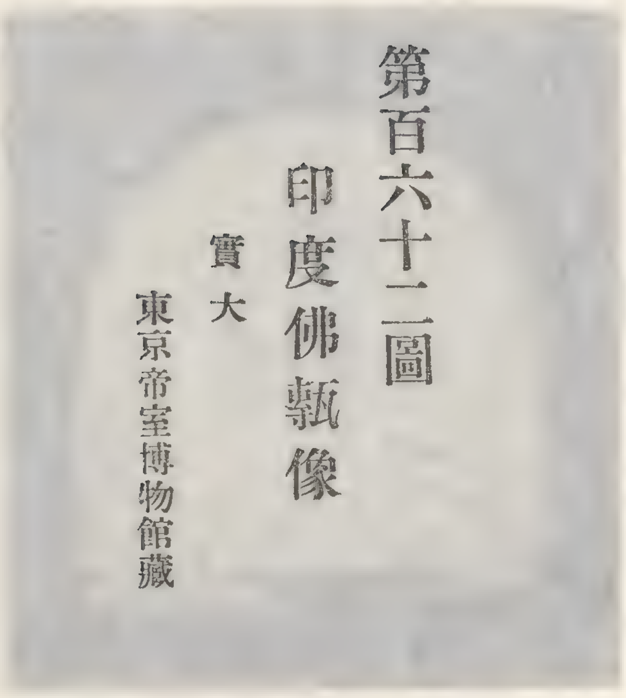
高麗山　中村勝三藏

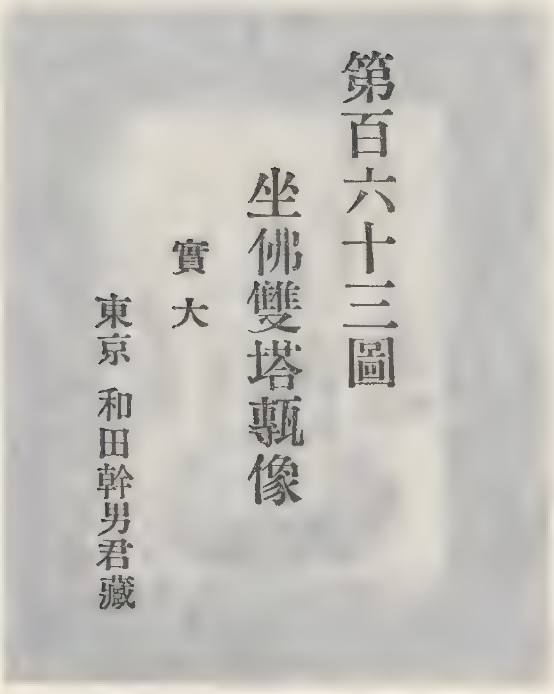
第百五十九圖　業用虛空藏菩薩木像

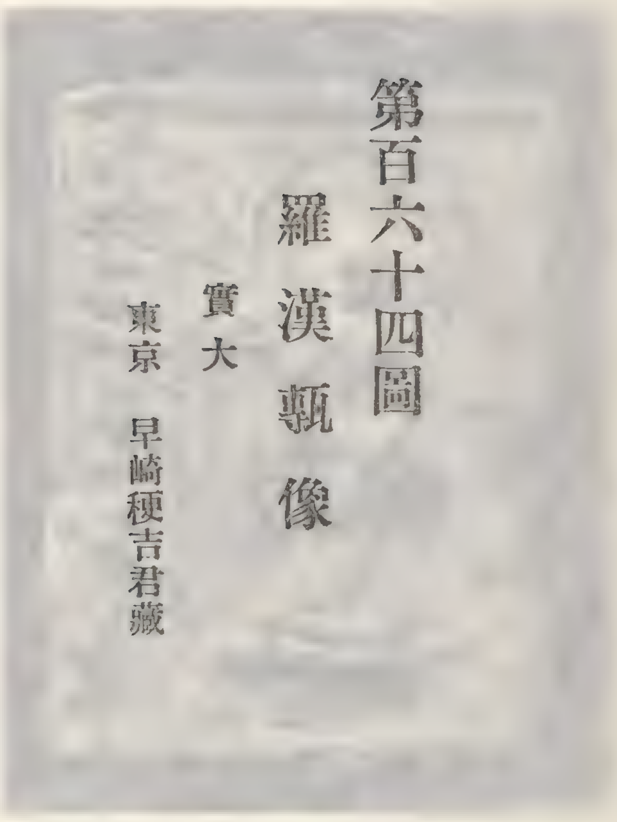
第百六十圖　金剛虛空藏菩薩木像

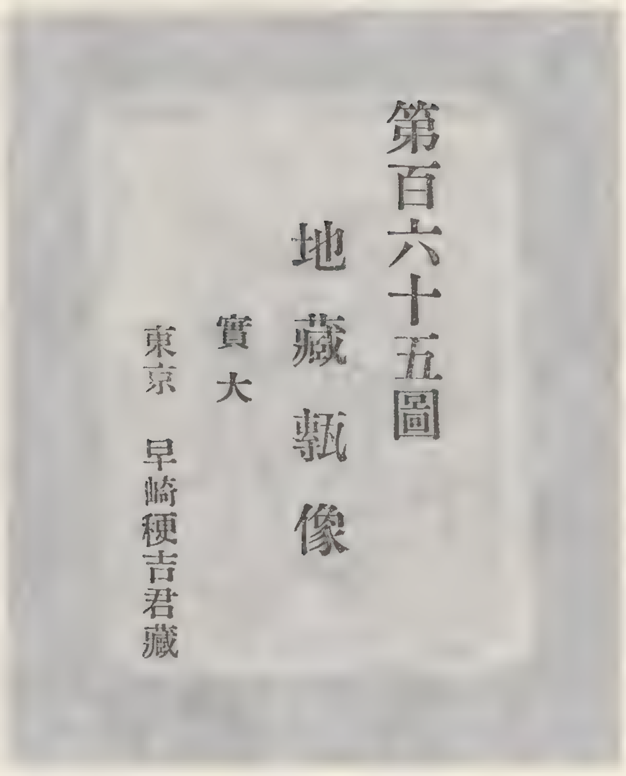
京都　觀智院藏

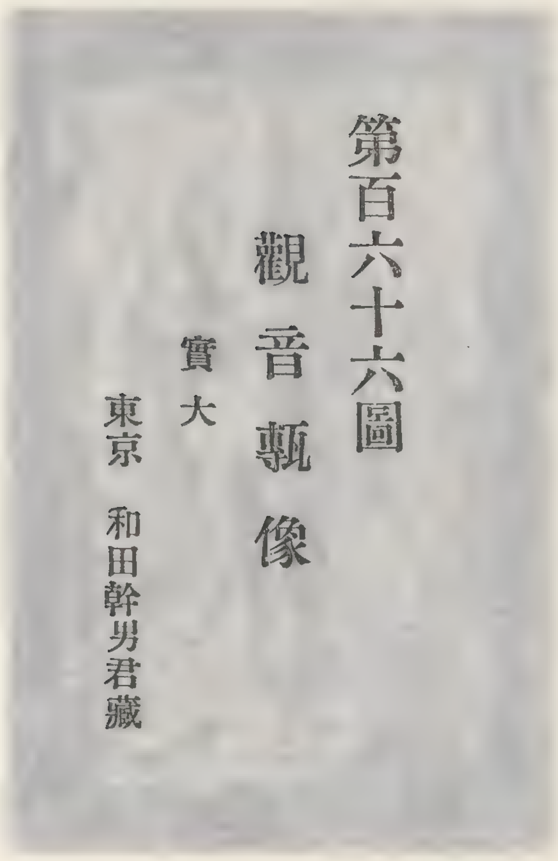

第百六十一圖　千佛甎像　實大　東京　和田幹男君藏

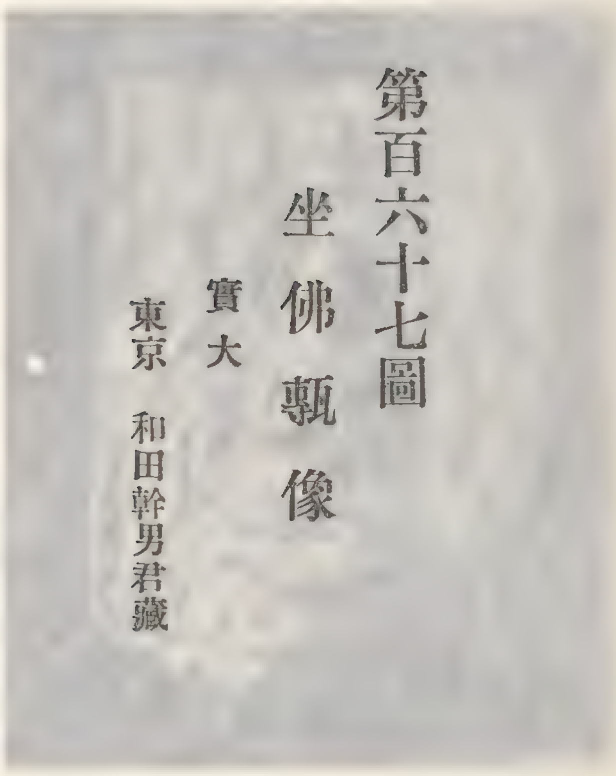

第百六十二圖　印度佛甎像　實大　東京帝室博物館藏

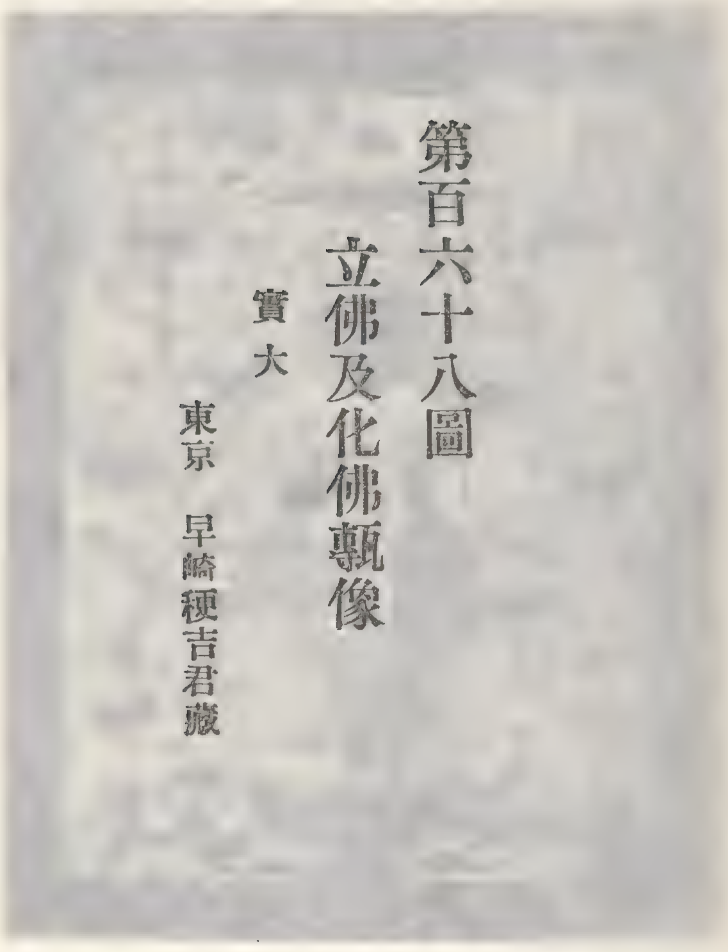

第百六十三圖　坐佛雙塔甎像　實大　東京　和田幹男君藏


第百六十四圖　羅漢甎像　實大　東京　早崎稉吉君藏


第百六十五圖　地藏甎像　實大　東京　早崎稉吉君藏


第百六十六圖　觀音甎像　實大　東京　和田幹男君藏


第百六十七圖　坐佛甎像　實大　東京　和田幹男君藏


第百六十八圖　立佛及化佛甎像　實大　東京　早崎稉吉君藏

第百六十九圖　倚佛三尊甎像　東京　和田幹男君藏

第百六十一圖 千佛甎像 實大 東京 和田幹男君藏

第百六十二圖 印度佛甎像 實大 東京帝室博物館藏

第百六十三圖 坐佛雙塔甎像 實大 東京 和田幹男君藏

第百六十四圖 羅漢甎像 實大 東京 早崎稉吉君藏

第百六十五圖 地藏甎像 實大 東京 早崎稉吉君藏

第百六十六圖 觀音甎像 實大 東京 和田幹男君藏

第百六十七圖 坐佛甎像 實大 東京 和田幹男君藏

第百六十八圖 立佛及化佛甎像 實大 東京 早崎稉吉君藏

第百六十九圖 倚佛三尊甎像 東京 和田幹男君藏

第百七十一圖　弘道二年造天尊碑像

高二尺三寸八分

東京　早崎稉吉君藏

第百七十圖　乾封三年造天尊石像

高九寸九分

第百七十二圖　開元十三年造天尊石像

高一尺一寸

東京　黑田太久馬君藏

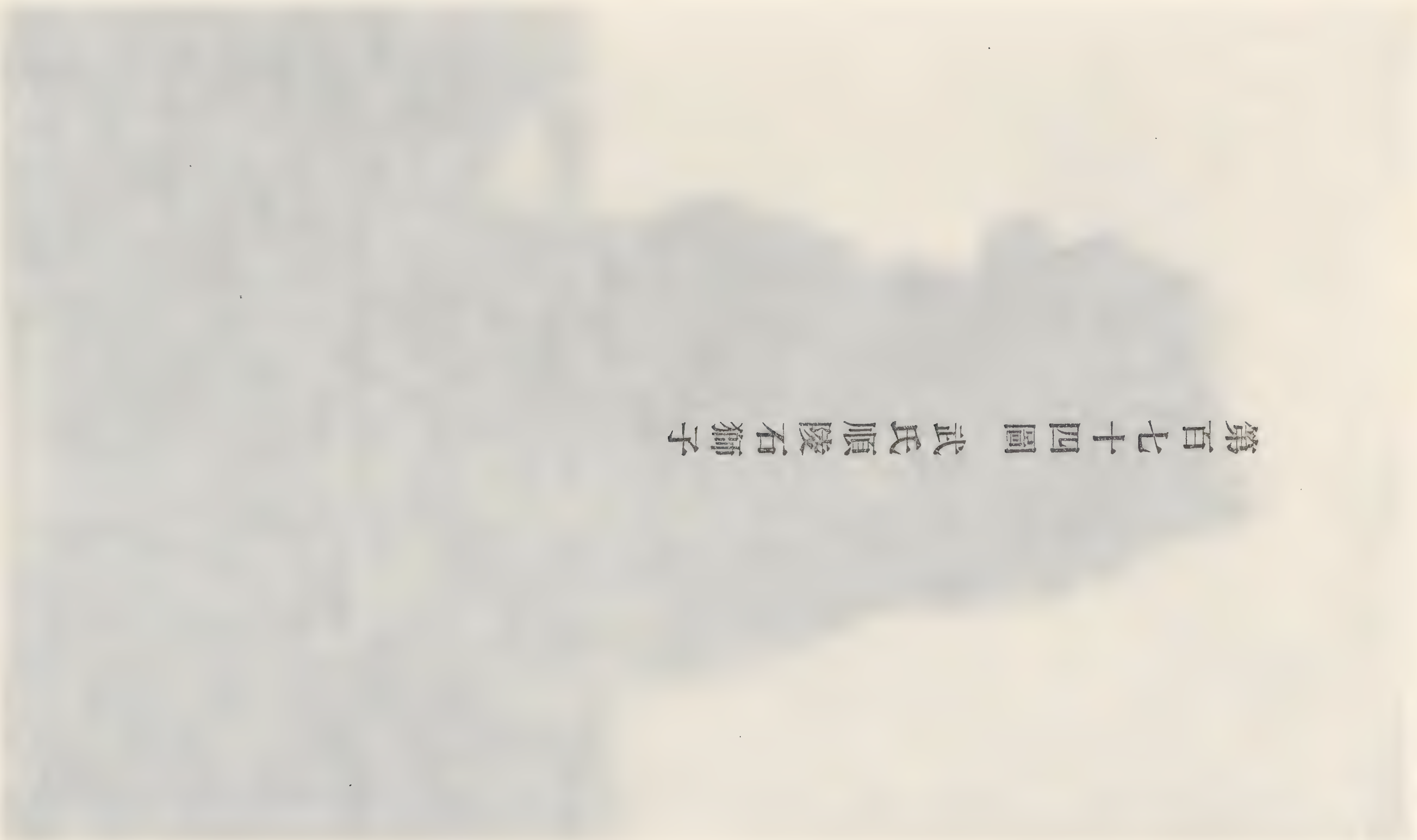
第百七十三圖　天寶九載造天尊石像

高一尺五分

東京帝室博物館藏

東京　早崎稉吉君寫眞

第百七十五圖　武氏順陵石獅子



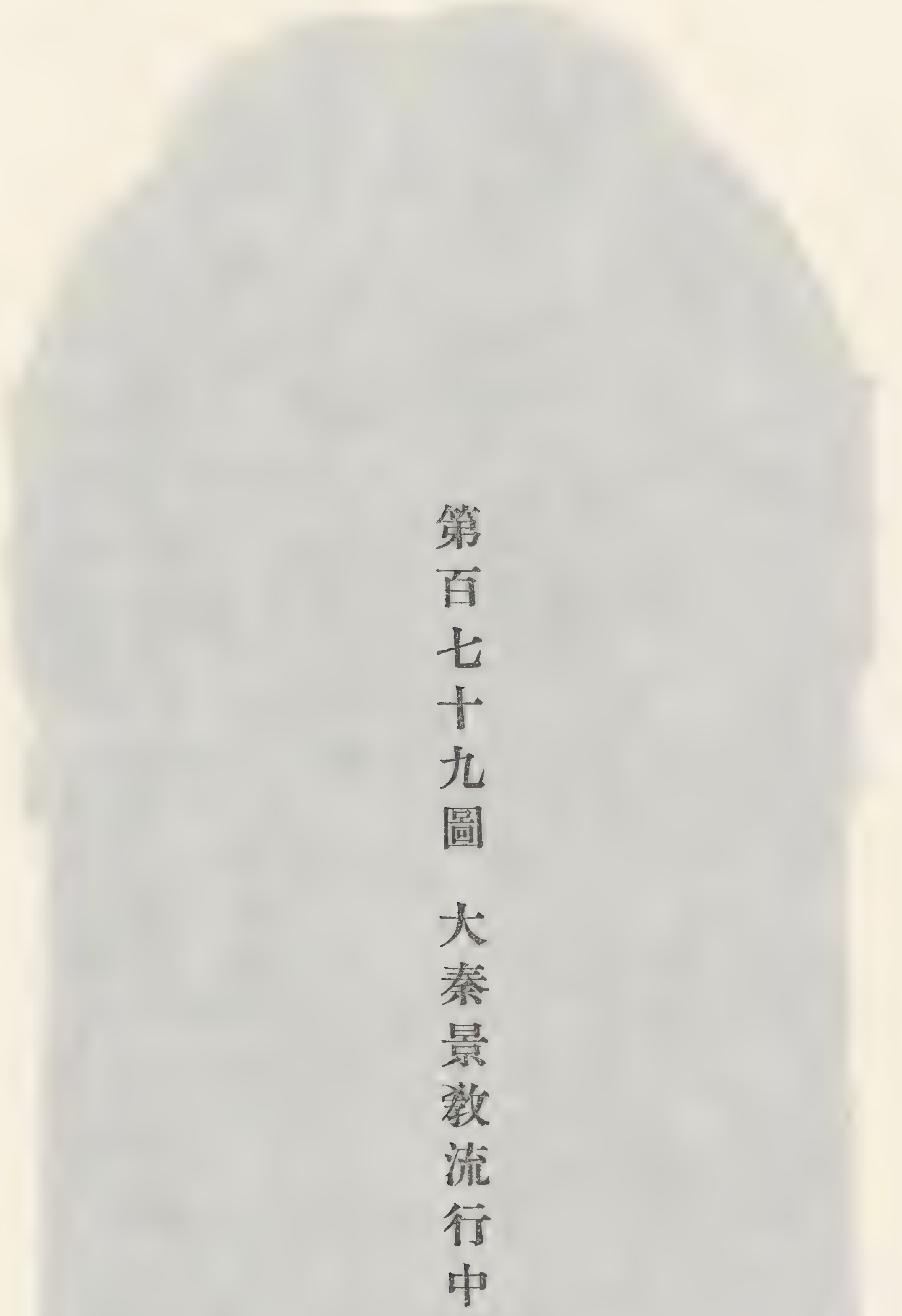
第百七十四圖　武氏順陵石獅子

第百七十六圖　美人彈阮咸白玉石像

高七寸七分

東京美術學校藏

第百七十七圖　左監門大將軍樊興碑



第百七十九圖　大秦景教流行中國碑

東京　早崎稉吉君寫眞

大秦景
教流行
中國碑

第百七十八圖　大唐三藏聖教序碑頭

東京　早崎稉吉君寫眞

大唐三藏
聖教之序

第百八十圖　立人俑

彩釉高二尺九寸

東京美術學校藏

第百八十一圖　文官俑

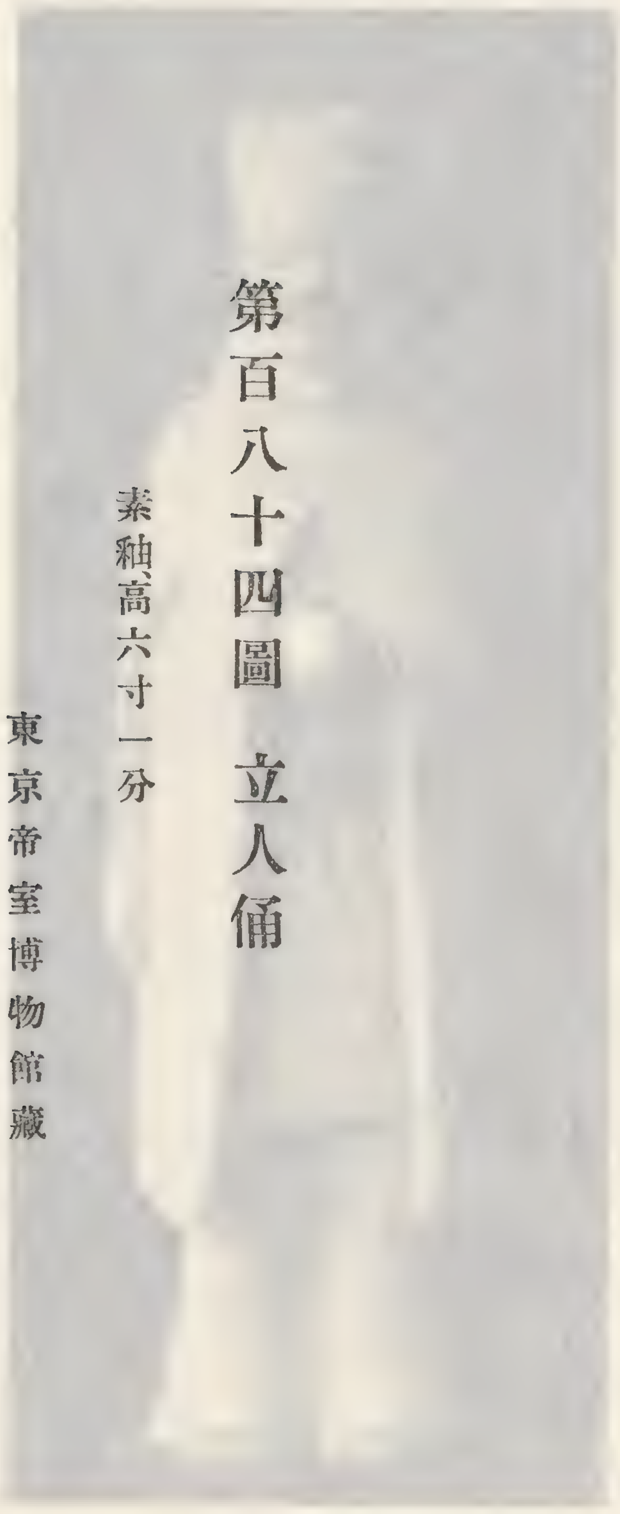
素釉高一尺四寸六分

第百八十二圖　武人俑

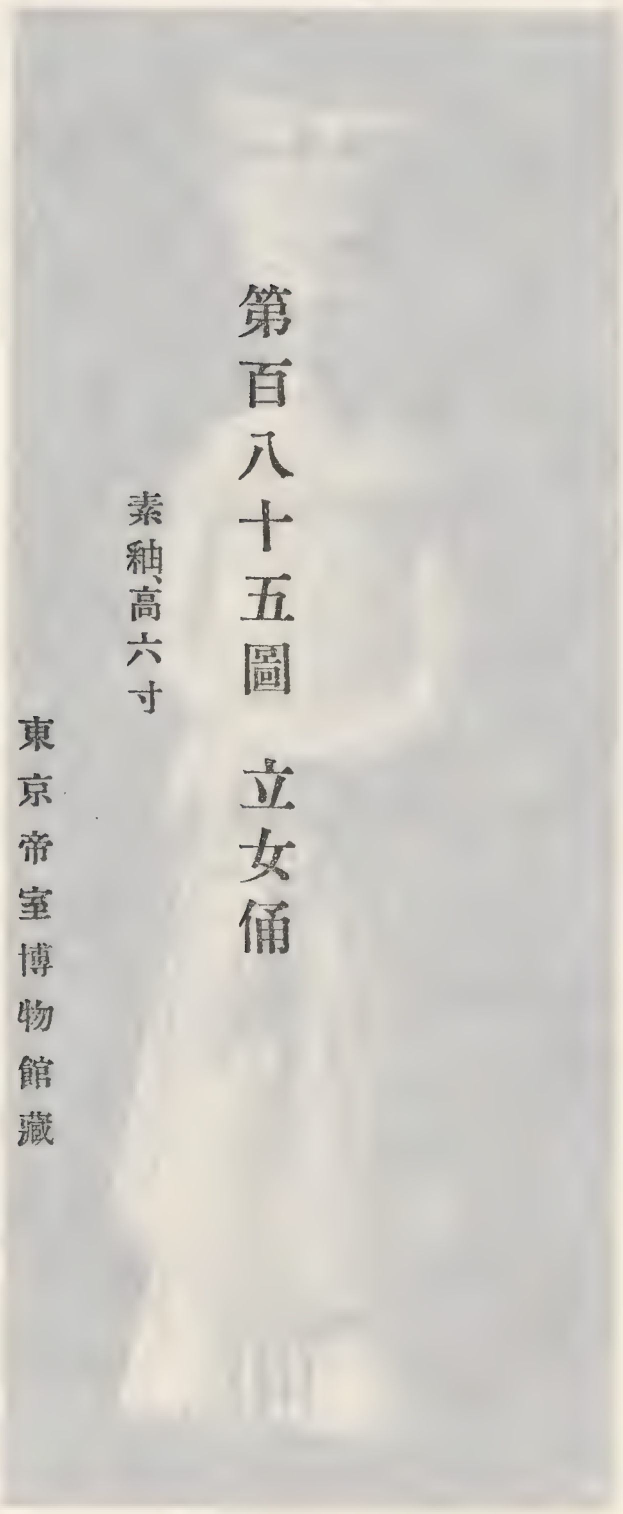
綠釉高一尺一寸八分

東京帝室博物館藏

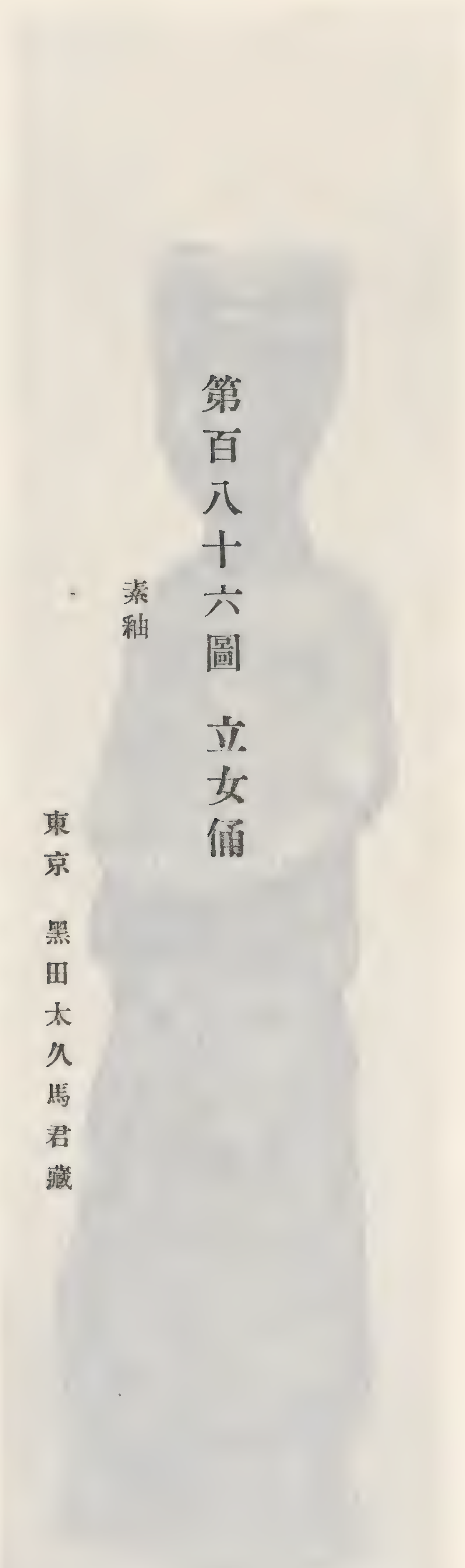
第百八十三圖　立人俑
素釉高八寸一分
東京帝室博物館藏



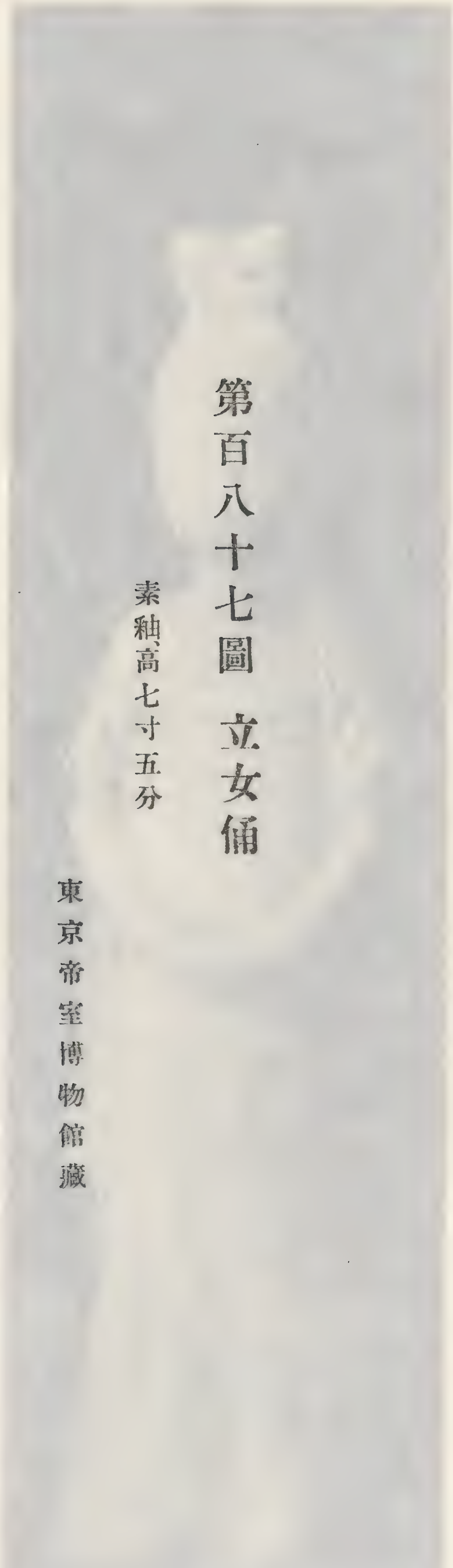
第百八十四圖　立人俑
素釉高六寸一分
東京帝室博物館藏



第百八十五圖　立女俑
素釉高六寸
東京帝室博物館藏



第百八十六圖　立女俑
素釉
東京　黑田太久馬君藏

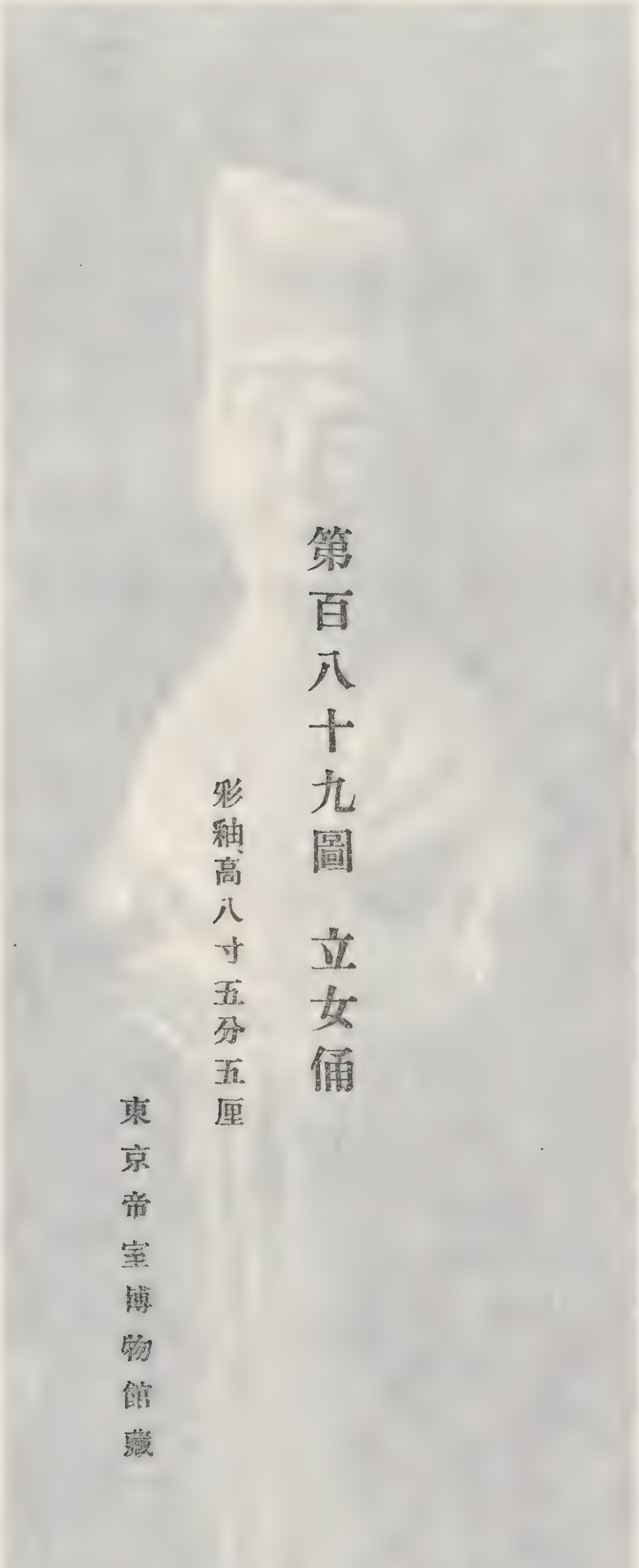


第百八十七圖　立女俑
素釉高七寸五分
東京帝室博物館藏

第百八十八圖　立女俑

彩釉高八寸五分

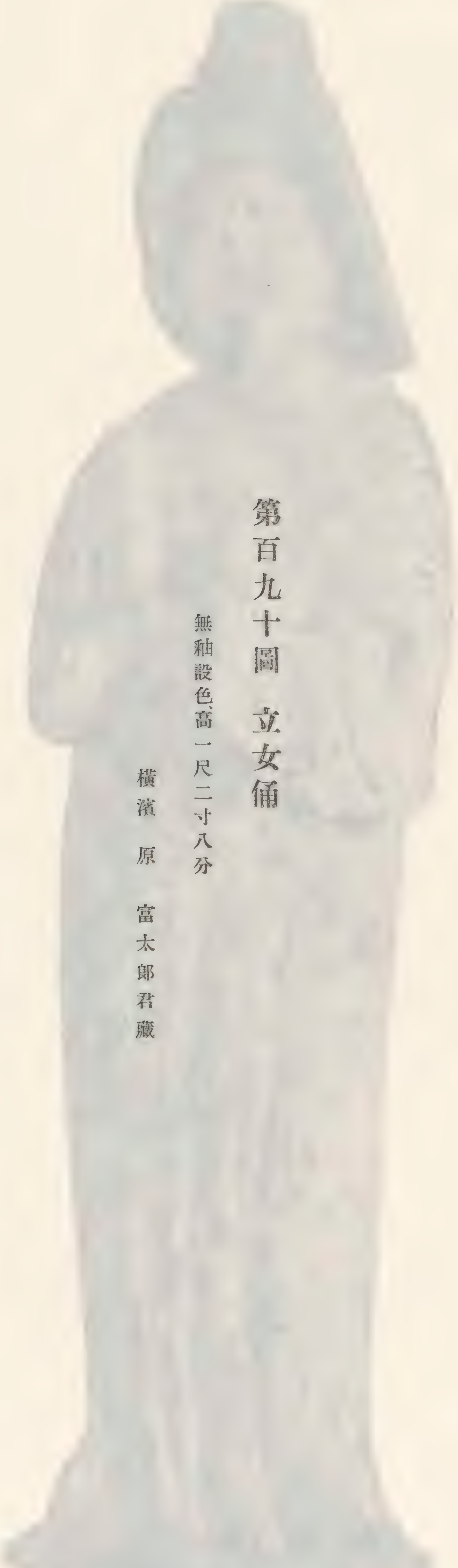
東京美術學校藏



第百八十九圖　立女俑

彩釉高八寸五分五厘

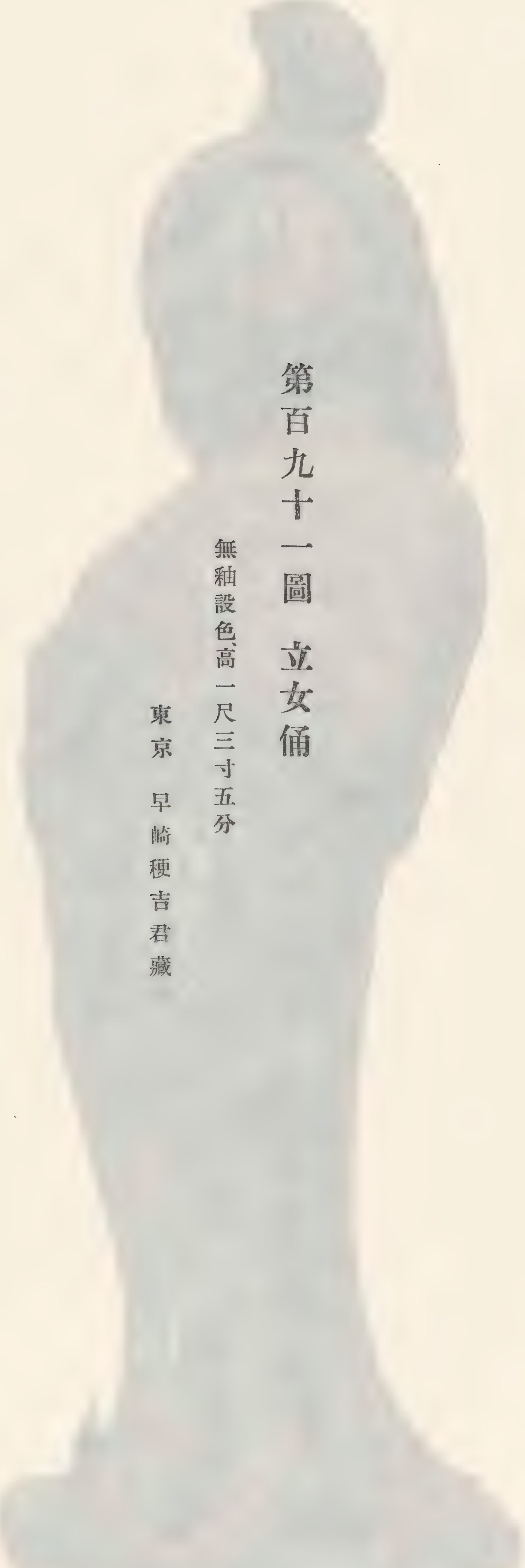
東京帝室博物館藏



第百九十圖　立女俑

無釉設色高一尺二寸八分

橫濱　原　富太郎君藏



第百九十一圖　立女俑

無釉設色高一尺三寸五分

東京　早崎稉吉君藏

第百九十二圖　辟邪俑

無釉設色高一尺一寸九分

東京美術學校藏

第百九十三圖　駝俑

彩釉高二尺一寸八分

東京美術學校藏

第百九十五圖　馬俑

彩釉高一尺六寸五分

東京美術學校藏

第百九十四圖　胡人俑　前圖の駱駝を牽く

彩釉高一尺一寸五分

第百九十六圖　胡人俑　前圖の馬を牽く

彩釉高一尺三分

東京美術學校藏

第百九十七圖　騎馬人物俑

素釉高一尺三寸五分

東京　黒田太久馬君藏

第百九十八圖　馬俑

彩釉高八寸六分

東京美術學校藏

第百九十九圖　鞍馬俑

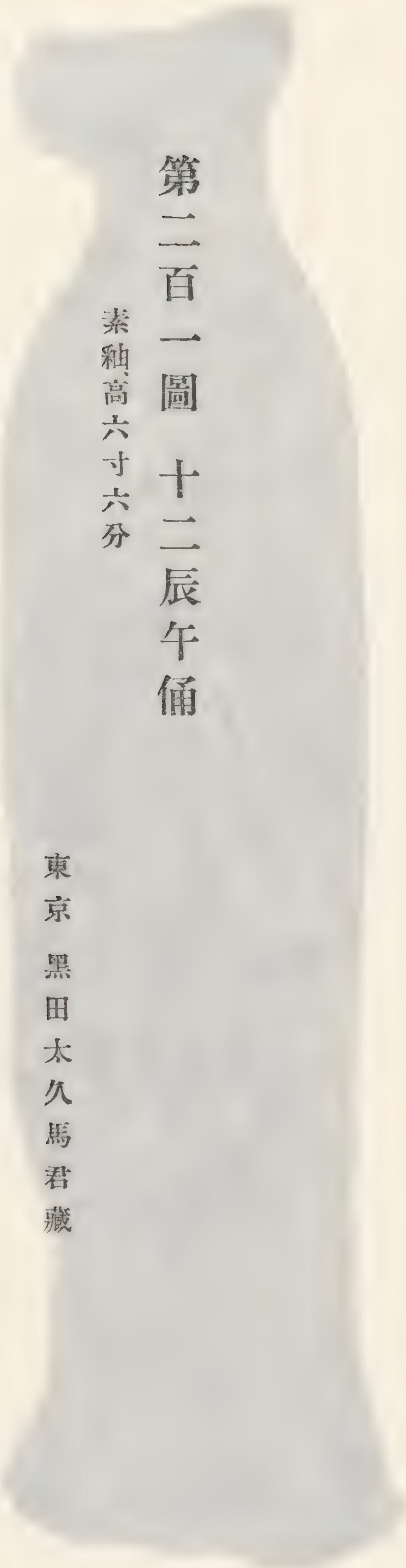
素釉、高一尺四分

東京帝室博物館藏

第二百圖　明器駕牛

素釉高五寸二分

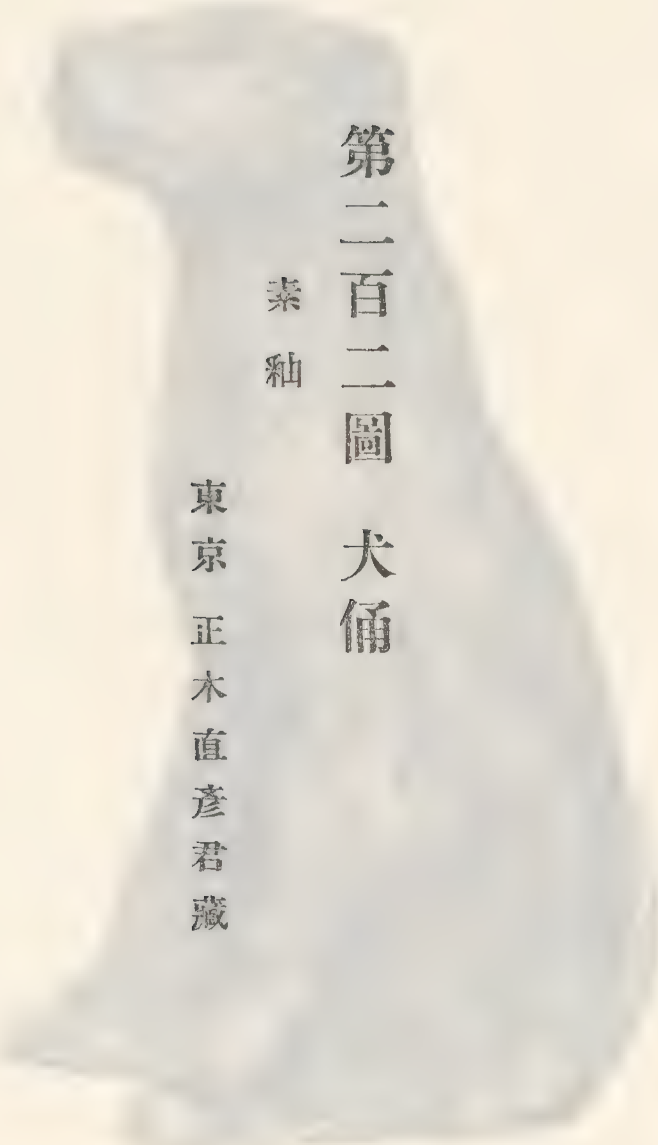
東京　和田幹男君藏



第二百一圖 十二辰午俑

素釉高六寸六分

東京 黒田太久馬君藏



第二百二圖 犬俑

素釉

東京 正木直彦君藏

第二百三圖 豕俑

赭釉高四寸五分

東京帝室博物館藏

第二百四圖 羊俑

赭釉高四寸七分

東京帝室博物館藏

第二百五圖 鳧俑

素釉高六寸三分

東京帝室博物館藏

第二百一圖 十二類手鏡

第二百二圖 [illegible]

第二百三圖 茶臼

第二百四圖 羊[illegible]

第二百五圖 [illegible]

第二百六圖　鳥獸蒲萄背圓鏡

香取神宮藏

第二百六圖　蟲爆叢譜書圖號

香坪梅宮藏

第二百七圖　鳥獸蒲萄背圓鏡

徑三寸九分

第二百八圖　十二辰背圓鏡

徑四寸八分

東京　早崎稉吉君藏

第二百九圖　鳥花背圓鏡

第二百十圖　鳥獸花背八角鏡

京都　桑名鐵城君藏

第二百十一圖　鳥獸背圓鏡

徑四寸八分

東京　竹內金平君藏

第二百十二圖　月桂背八角鏡

徑四寸一分

京都　桑名鐵城君藏

第二百十一圖 鳥獸背圓鏡

徑四寸八分

京都 [illegible]所藏

第二百十二圖 [illegible]背八鳳鏡

徑四寸一分

京都 [illegible]所藏

大正四年十一月二十一日印刷
大正四年十一月二十五日發行
（東洋美術大觀第十四冊彫刻之部奥附）

不許複製

編輯兼發行者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院代表者　縫田勘六

寫眞版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院寫眞版部主任　中山音次郎

活版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院活版部主任　神山雄吉

印刷兼發行所　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院
電話京橋（長）三五五番
一二五番

發行所

東京市京橋區新肴町十三番地

合資會社 審美書院

東京電話本局 二三五一番 二三五二番

發行兼編輯者 [illegible]山 [illegible] 吉

東京市京橋區新肴町十三番地 審美書院編輯主任

印刷者 中山 音 太 郎

東京市京橋區新肴町十三番地 審美書院印刷部主任

製版印刷者 [illegible] 田 [illegible] 六

東京市京橋區新肴町十三番地 審美書院代表者

不許複製

大正四年十一月二十五日發行

大正四年十一月二十一日印刷

（東洋美術大觀第十四冊[illegible]）

SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES
3 9088 01612 7748